

11/1X30



社會問題

マスター  
オブ  
アーツ  
大原祥一著



東京  
秀英舎

## 序

夫れ社會問題は實際問題なり、其解釋如何は獨り現在社會の命脈に關係するのみならず、惹て來る可き社會の運命を定むるものなり、一言以て之を掩は、人生必需の最大問題なり、苟も憂國慨世の士たる者の豈一日も其研究を忽諸に付して可ならんや、大原祥一君年少米國に航し、滯留十年餘、同地の諸大學に遊び、經濟、社會、及び統計の學を講じ、殊に社會問題に關しては有名なる「ワーナー、ロックス、ジョーダン、サムナー」等の諸博士に就き親しく其學說を聞き、且つ自ら覃思研精敢て或は怠ることなく、而して後博く米國各地を巡遊し、大儒を訪ひ、哲家を尋ね、深く其實情を探尋し、其の得る所は君の名說となり、屢我經濟雜誌

に現はれ、紙上に光輝を放ち、讀者の喝采を博したること  
曾て一再にして止らず、嗚呼君が如きは研究す可き問題  
の選擇に於て頗る其當を得たるものと云ふべし、君今や  
財政、トラスト、勞働、及び社會に關する論文を蒐集補足し  
て一冊子となし之を「社會問題」と名け以て世に公にせん  
とす、書中の所論悉く余が持説と符合するものにあらず  
と雖、斯道の研究に裨補する所尠からざるは必しも歎々  
を要せざるなり、余深く其舉を賛す、故に此書の成る所以  
を書して以て卷端に辨すと云ふ。

明治三十五年十月

田口卯吉識

## 序

人生文字を知るは是れ憂患の始めなりと、眞に其言の如  
きものあり、然れども文字を知らざれば則ち憂患なきに  
はあらず、之を知らざれば則ち憂患する所以を知らざる  
なり、社會萬般の事何事も知らざれば則ち天下は太平な  
り、是れ天下の太平なるにあらず、天下の太平ならざるを  
知らざるのみ、人、生理の之を知らず、又衛生の之を知らざ  
れば病の其身に存するを知らず、重症起つ能はざるに至  
て始て病の其身に存せるを知らん、事此に至ては已に救  
濟の策無らんとす、然らば則ち生を重んずるもの、生理衛  
生の事を知らざるべからず、生理衛生の事を知らずして  
徒らに其強健を誇るが如き、畢竟田舎翁嫗の事又論ずる

に足らざるなり。蠢然斯くの如くにして人生の至樂と爲さば。人と豚犬と何の選ぶ所あらんや。友人大原祥一君久しく北米の大學に遊び經濟及社會の諸學に造詣する所あり。今や社會問題を纂聚して世に公にせんとす。是れ一面は社會の生理衛生に關し一面は社會の病的徵症に關する緊急動議と見るべきものなり。有志の士本書を一讀して病を輕きに救治するの道を求めば。獨り著者の満足に止らず抑又國家百年の幸なるべし。

明治三十五年十月

吳 文 聰

## 序

池深ふして蛟龍を生じ時艱にして豪傑を産す、今や財政の紊亂風教の頹敗相結んで將に社會の騷擾を醸さんとす、既に霜を履まば焉んぞ堅氷の到らざるを頼むべけんや、  
宜なる哉眼光を社會問題に注ぐ者踵を接して興らんとすること、此の際に於て夫の渺茫たる社會問題に津梁たらんとする者あらば誰か雙手を舉げて歡迎せざらんや、  
已に余が益友矢野文雄君の勞働救護保險方案及四級團著はされたるに加へて今や吾人は此の大原君の好著に接す、争てか我が社會の爲に賀せざるを得んや、嗚呼是亦時艱にして豪傑を産する者歟、云ふ蟒蛇の出んとするや

必ず先蜴蜥飛ぶと、此の著の如きは焉んぞ是れ將に大原君の手よりして宇宙を呑むの大著出て來らんとする先驅たらざるを知らんや、翹首して更に大に君に待つ所あるなり。

明治卅五年十月

辱知 高橋五郎拜識

### 自序

近來商業、工業、政治等の發達進歩するに共に社會は愈々復雜繁多となり所謂社會問題の續々現出するに至りたるは誠に必然免る可らざるの理勢にして吾人の認識す可き所なりとす、而して斯の社會問題なるものは國民の生命、品性、幸福及び國家の組織、機能、効用に直接關係を有するが故に實に國家の命、國民の運を司る巨大の「スフ・シンクス」も云ふ可きなり、社會問題なる「怪物」は無心にして亦無情なり、能く其謎を解明する者にのみ生と發達を許し、能くせざる者は必ず之を殺滅す、是れ過去の歴史が明に示教する所にして亦疑ふ可きに非ず、故に今日心を社會保存、國家改良に致す者は必ず先づ此の社會問題否「スフ・シンクス」の謎を、研究解釋するに努めざる可らざるなり。

此の冊子中記する所の多くは著者が近時東京經濟雜誌、社會學雜

誌、獨立界雜誌に於て嘗て論じたるものなるが故に再び之を公にするを欲せずと雖知友の時勢を説き勸告甚だ急なるものあるを以て茲に蒐集校正し且つ未だ公にせざるもの數章を附加して一冊子となし書肆に托して出版せしむ、書中の論旨多くは蕪雜、殊に累積する社會問題の一小部分を論じたるに過ぎざるが故に一の著書となすに於ては稍物足らざる感あるも只だ著者の希望する所は此の小冊子が世に公にさるゝ事に依て將來斯問題に關する大著述を挑撥するの資料たられん事にあり、讀者幸に之を諒せよ

明治三十五年晚秋

著者識

## 社會問題

### 目次

第一章	理想と實際	一
第二章	富の不平均	一三
第三章	産業的生存競争	二八
第四章	國家と労働問題	四四
第五章	世界の人口	五七
第六章	商業と道德	七四
第七章	労働組合	八二
第八章	遺産相續税	九三
第九章	國家は労働問題に就て干涉するの權利を有するや	一〇四
第十章	産業界に於ける傾向	一二四

第十一章	慈善事業……………	一一一
第十二章	「リカード」氏の賃銀及利潤論を評す……………	一三五
第十三章	婦女及幼年者の勞働……………	一四六
第十四章	退化論……………	一六一
第十五章	「トラスト」の時代……………	一八三
第十六章	社會は有機體なりや……………	一九二
第十七章	同盟罷工……………	二〇八
第十八章	單税を論ず……………	二二三
第十九章	慈善を與ふ可き人と場所……………	四四〇
第二十章	「トラスト」の經濟濟……………	二五三

附 錄

第一章	社會主義を評す……………
第二章	社會主義の經濟説を評す……………
第三章	矢野龍溪氏の「新社會」を評す……………

社 會 問 題

マブスタツ 大原祥一著

第一章 理想と實際

理想は希望なり希望は光輝なり、個人にして理想なからんか之れ希望もなく光輝もなき一個の動物に不過るなり、社會にして理想なからんか之れ亦獸的行爲に蠢蠕たる動物の集合に他ならざるなり、理想は實に之れ人類を以て他動物と異ならしめ、人類の社會を以て他の動物社會と分たしむるもの、云はざる可らず、經濟を論ずる者策を献ず、世は嗤て曰ふ理想のみを社會を議する者其説を開陳す、人は嘲て曰く「ユトピア」を而して其の何か理を以

て之を理想と云ひ何の所以を以て之を「ユトピア」攻撃するにや  
を糺せば只今日に於ては存在せず現時に於て之を實行し難しと  
云ふにあり、無法豈に驚く可へきにあらずや、若し單に説の嶄新論  
の奇拔なるを以て不必要のものとなし、一も二もなく之を理想と  
ふ言字の下に排斥せば天下何れの日か新智識を作り社會の改良  
を行ふを得ん、何れの處に依てか人心を開發し以て文明を増進す  
る事を得ん、理想や實に之れ吾人の燈明臺なり羅針盤なり之れ無  
んば吾人は暗裡に匍行する盲蟲に同じく吾人の社會は逆浪萬丈  
の間を羅針盤なくして漂流する船と異ならざるなり、理想なきの  
處奚ぞ能く安全を保んや、安全なき處に實行は求む可らざるなり、  
高尚なる理想を有する者は決して今日社會に存在する常物を以  
て満足せざるなり、何となれば彼の欲する所は完美せる事物にあ

ればなり、彼は常に不平なる可し、不満なる可し、然れども此の不平  
不満こそ實に彼をして、進歩せしむるものなり、云はざるべからず、理  
想にして益々高尚ならんか不平は益々大なる可く、不満は益々高  
尚なるべく而して不平不満の多くして高尚なるは即ち之れ發達  
を意味するものなり、極端なる樂天主義は極端なる感情の産出に  
して諸事の進歩は之に依つて阻る可し、「ワード」は其社會學概論に  
論じて曰く、樂天主義は進歩を止め停滯を生ず、其は満足を生じ滿  
足は不動を生ず可し、世或は怪まん、然れども意識の健全なる状態  
は懷疑に依て保たるべからず、かごとく感情の健全なる情態は不平に依  
て保たるべからず、不平必ずしも「ライブニツ」が嘲笑し去りたるが如き無  
用のものにあらざるなり、雖然、不平は常に理由と希望を有せざる  
可らず、然らざれば其は「シヨツペンハーウエル」の厭世主義と化し



去らんのみ、厭世主義とは現在の慘憺たる情況のみを見て以て直に之を未來に及ぼし今日の不平のみを知つて亦明日の希望を知らず落魄自棄世を罵り人を恨み遂に暗昏たる「失望の洞中に枯死する卑屈主義なり、樂天主義は只人類の強點及社會事物の完全なるもののみを觀、厭世主義は人類の弱點及社會事物の汚惡なるもののみを知る、故に兩者共に偏見にして公平を缺くもの云はざる可らず、楯に兩側あり社會亦何ぞ善惡を有せざらん、其一面のみを見て他面を見ざるの主義は之れ一眼主義なるが故に決して吾人の採る可き所にあらざるなり、然らば吾人の依て以て立つべき主義は則ち如何、樂天と厭世の綜合なる尙善主義あるのみ、尙善主義は現在の不完全を認るゝ共に未來の完全を思ふが故に達識にして希望を有する主義云ふ可きなり、斯主義已に希望を有す亦

理想なかる可らず、

人類は自己の意識に依て其性行を變じ志想を啓發して社會を改善することを得るものなり、社會の進歩は、スペンサー氏が云ふが如く單に無意識なる進化の結果にもあらず、亦ワード氏が云ふ如く人類の意識のみに依て生ずるものにあらず、其實無意識なる進化と意識ある人心との二に依て生ずるものなり、然り而して社會の進歩には一定の軌道なかる可らず、動力なかる可らず、速力なかる可らず、極點なかる可らず、之を汽車に例へば進歩は列車なり、意識は動力なり、進化は速力なり、知識は軌道にして理想は極點なり、事理此の如し社會の進歩に理想なくして可ならんや、世人稍もすれば學術と理想の相反するを云ふ、即ち理想高ければ實行に迂なるが故に科學的ならずと然れども之れ皮相的迷論を

六  
り、科學、藝術の如きは吾人が理想に近く爲の方法なり、故に此の方法にして進歩發達するは常に理想に近接するを意味するものなり、理想界は吾人と相去ると甚遠し故に之に達せんと思せば吾人は大速力を以て進行せざる可らざるなり而して進行は即ち實行なり、實行は實際的ならざる不可而して實際的の實行は科學、藝術に依らざる可らず、理想界に達する道路には荆棘多し阻險多し、曰く不徳、曰く貧困、曰く退化、曰く無能、曰く無學、曰く無識、等枚舉に違あらざるなり、而して之等の妨礙物を一掃して先づ道路を清め以て吾人の進行を易からしむるものは實に藝術及科學の天職にあらずや、吾人を包圍する萬物の性行品質を知らざれば吾人は自己の位置と理想界に到る可き道路を見出す不能るなり、吾人の耳目を誘動する自然の美を知らざれば吾人は理想界の美を思ふこと不可

能るなり、之れ實に吾人の美術と科學を要する所以なり、美術と科學あるが故に吾人は現在の不完全を知り、未來の完美を推し以て理想に近かんことを欲するものなり、科學は明光なり之に依て昨日の不可は今の可となり、今之不能は明の能となり、事物は明了となり、人心は開發す、故に理想を以て單に哲學的迷想となし之を一笑に付し去る者は未だ科學の何たるを知らず、人生の目的の何なるやを知らざる者なり  
生とは何ぞや、スベンチー答て曰く、内外關係の連續的調和と亦補添を要せざる答なり、吾人々類が地球の表面に於て生を保ち活動を全ふする所以のもの唯吾人と吾人を包圍する萬物の間に連續的調和あるが故なり、此の調和の破綻する時は即ち人類滅亡し社會廢壞す、然らば吾人の爲す可き所は吾人をして完美ならしめ環

象をして便宜ならしめ、而して兩者の關係を調和するにあり。人生の目的は何ぞ、幸福、即之なり、先哲ソクラテス嘗て云へることあり、人は食はんが爲に生活するにあらず、生活せんが爲に食ふなり、而して其生活せんが爲に食ふは之の幸福を求めんが爲なり、人生の幸福とは抑も何をか云ふ從來の哲學者之を解して曰く眞理の發見と曰く自然的生活と曰く道德的生活と、然れども之れ甚た空漠なる解釋にして其說正なる可きも尙以て人生の幸福を悉く解するに足らざるなり、人生の幸福とは苦を避け快を求め、而して生の完美を得るにあり、換言之を云ば人生の幸福の大部分は快樂にあり、人は慾望を有するが故に活動す、然れども其慾望する者、其活動して得んとする者は苦に非ずして快樂なり、眞理の發見も一の快樂なり、道德的生活も亦一の快樂なり、然れども余輩の云ふ

快樂とは或る種の快樂を云ふにあらずして諸種の快樂の總合を云なり、ワトド氏は快樂を分て生殖的快樂、養育的快樂、審美的快樂、感動的快樂、道德的快樂、智的快樂となせり、其分類甚だ妙なれども、狭少に過ぎるが故に諸種の快樂を悉く網羅するに不能るの恐あり、余の云ふ快樂とは廣義の快樂にして、ギッディング氏の所謂、徳、完全、自覺の如きをも含蓄するものなり、故に單に個人の快樂を云ふにあらずして社會に於ける個人の快樂を云ふなり、エビキユリアン派の怠睡的快樂と云ふにあらずして眞正の社會的快樂を云ふなり、幸福、慾望、快樂は共に之れ必要なものにして趣味多き問題なれども余輩は此處に之を詳論せざる可し、余の云はんとする所は唯人生の目的なる幸福は理想と離る可らざるものなり、云ふにあり、幸福元より動的なり、快樂元より比較的なり、故に何れの時

代と雖存在せざることなし、雖然最大なる幸福完全なる快樂は吾人が理想に達したる時に於て始めて之を得るものなり

實際的とは何をか意味す、單に實行し得可きを云ふにあらずして實行と共に其希望せる結果を生ずるものを云ふなり、機械あり單に運轉するを以て實際的とは云ふ可らず、希望する貨物を生産して始て實際的と稱す可きなり、社會的機關に於ても亦然り、宗教制度、經濟機能、政治團体の如きも其希望する所を生ずるに不非れば何ぞ實際的社會機關と云ふを得んや、故に實際的とは單に動轉するものを意味するに不非して活動即ち動轉して其目的を達するものを云ふなり、近來物質的文明の發達と共に人は悉く器械的となり現世的となり、徒に理想を罵倒して物質を崇拜し、吾人の方法たる機械を以て目的と誤り、方法たる金錢を以て目的となし、齷齪

止むなきは眞に悲む可きの至りなり、蒸氣の力や實に大なり、電氣の力や實に偉なり、金錢の力や實に驚く可きなり、雖然之れ皆吾人が理想に達し最大最終の幸福を得んとする方法に不過るなり、世に方法を以て目的となすものあり、誤の之より大なるはなし、勿謂吾人は理想を不要と、大なる理想なき處に大なる實行は求む可らざるなり、理想を以て想像の結果となし之れを排斥する者あり、然れども想像は一大社會的動力にして決して排斥すべきものにあらざるなり、文明の社會に想像なくんば亦何を以てか其文明を保全し增長するを得ん、文學興り美術發し詩歌生じ機械現はれ道德高まる、皆之れ想像の美果にあらずや、米國人は能く發明す彼れらは機械的想像力を有するが故なり、獨逸人は學に深淵なり、智的想像に富むるが故なり、英國人は能く商利を獲得す、商業的想像力の

敏活なるが故なり、日本人は美術に長ず、美的想像に富むが故なり、故に理想を以て想像の病をなし之を斥るは甚だ不可なり。理想は余輩が以上述べたるが如し、然りと雖此の理想に達するに、は先づ順序的進行を計らざる可らず、不然ば事空望となり散滅し去る可し、之を實行に附すに當ては須く時代と環象とを委察して秩序を正さざる可らず、物には必ず順序あり、事には必ず定法あり、之を無視するの實行は到底成功し不能なり、無政府主義の如き、社會主義の如き、極端なる個人主義の如き、其理想とする所甚だ美なれども秩序の大法を無視するが故に余輩の首肯し不能る所なり、理想界に達する階梯は順序的に上らざる不可、其頂上のみを見て實行を知らざるものは、これ星を仰ぎて遂に井中に陥りたる迂人に比しき空想の奴隸なり、理想は空想にあらず、空想は不秩序にして實際的ならざるも、理想は順序的にして實際的なり、否、眞個の理想は然かある可きなり。

今日の世或は單に機械の奴隸となり、或は單に物質の蟲となり、人に心と情あるを忘れ、徒らに理想と實際の相反するを説き新論異説を悉く「理想」てふ名目の下に擯斥する者あり、愚の極と云はざる可らず。

## 第二章 富之不平均

地球を一貫して今や貧富の懸隔甚しく、貧は益々貧に陥り、富は益々富を致す、又中産者と稱する者も日一日に其數を減少し、多分は富者の吞噬に斃れ、貧者に變ずるに至る之に依りて考ふれば、世界は總て將來貧富の二大階級に變化し了るやも知る可らず、而して

此の如き階級の懸隔は今日に於ても非常に大なるものにして、一は路傍に田野に工場に會社に終日勞働するも尙ほ衣食を満足する能はざるものにして、一は大厦に高樓に温泉に海水浴に終宵快樂を貪り居るも彼等の富は益々其の富を増殖する者にして、二者の状態に於ける其の相去る如此、多くの場合に於て貧人の貧たる所以は富者の富たる所以にして、彼等貧人が粒々辛苦の流汗は富者に取りては一種の滋養物にして、又富者が會社の事業に資本を凝集するは貧者に取りては益々其の貧を加ふる一種の妙劑たるが如し、佛の「ユーゴ」氏嘗て云へり、富人の樂園は貧人の地獄より造らるゝ、彼の時に於て已に此の歎あり、況んや徳義なき今日、節義なき今日、拜金徒多き今日に於てをや、貧者の飢に泣くゝ同時に、一方に花に酔ふの富者あるは敢て怪しむに足らざるなり。

然れども天の人に對するや一視同仁にして貧富の區別あるなし、唯だ其の依て異なる處のものは彼等に於ける頭腦の運用と時運の適否如何に依て其の變化を生ずる者なり、然るに一朝富者なるや恰も天賦の權力あるが如く自から稱して上等社會と唱へ、勞働に従事する貧者を驅馳するこゝ犬羊の如く、其の權利を剥ぎ膏血を吸収し貧者をして益々貧困の境遇に陥らしめ、彼等幾多の貧者が悲哀に號呼するも敢て意に介せざるに至る者多し、而して彼等富者は何が故に此の如く富裕を致したる乎、其の起因を尋ねれば彼等は相場にて儲けたりとか、或は特許の業に就くの幸を得たりしに因るとか、或は政府の保護を受けしに因るとか、或は御用商人たる事を得しに因るとか、寧ろ彼等が自身の頭腦を正當に運用し得たる結果に基因するの少くして、彼等の富を致せし多くは僥

伴に不正理に依りて成りたるもの多しと云ふも、敢て不可なきなり、依之觀れば彼等富者が蔑如して痴愚と呼び下等社會と稱する貧人の起因は多くの場合に於て彼等の如く不正理に向て頭腦を運用せざるに、又好機運に遭逢せざる不幸に結果するものにして、一方より論ずれば彼等貧者は實に善人善女の輩なり、彼等が自邊に纏綿せる貧困の二字は決して天然の生出に非るなり、彼等が頭上に頂載する壓抑の二字は決して自然の條理に非るなり、貧富起因此の如しと雖も、一たび貧と變じ富と化するや、富は益々富を致すと共に貧をして益々貧を重ねしむるに至る、換言すれば貧者の増殖は富者の醸造に成る者にして、復た昔日の如く頭腦の運用と時運の適否に非るなり、今や世界到處幾多の貧人は富者の爲めに壓抑せられ、其の境遇を窮迫せられ、彼等の悲鳴は將に天を憾し、

彼等の絶叫は將に地を動さんとするものあり、然れども不幸にして彼等は未だ充分なる天恵に浴せず、充分なる地恩を蒙らざるなり、天邊に皓々たる月華は明鏡の如く富者の眼眸に映するも、貧者の爲めには提灯の代用をなすに過ぎざるなり、地上に皚々たる白雪は銀花の如く富者の高樓を粧ふも、貧者に取りては衣單の寒を覺へしむるのみ、

何が故に貧は貧を重ね、富は益々富を致し、貧富の懸隔として愈々甚しからしむる乎、余は先づ之を近世の經濟組織に歸せん、今日之の經濟組織は、資本は資本を生じ、事業は事業を生じ、利益は利益を生ずる有様にて、若し一たび富者と成り又幸ひに富豪の家に生れたる者は自から手を下すの勞なく自から事業を企つるの面倒なきも、會社又は銀行に向て其の資金を投入し置ば相當の利益を

得、相當の權利を得るが故に、隨て威權を弄することも得べく、贅澤なる生計も營む事を得べきなり、

又商業界に於ても大は小を呑み、多は寡を制するの傾向あり、見よ大資本を有し多數の人を使役する商店は小資本なる、所謂夫妻共稼的の商人より大なる商業取引を爲す故に、利益は隨て大に損失は割合に少し、思ふに大資本を有する會社及商人は物價下落の時に於て一時に多額を買收し置くの餘裕あるが故に、物價の高低に拘ず小額の物品を度々仕入する者に比すれば安價にて賣買するここを得るなり、又幾多の人を使役し幾多の品物を所有するが故に、購買者をして自由に便利に買ふを得せしむ、之に依りて大會社大商店の繁榮を一方に表すと共に一方に小商店小會社の消滅を伴ふ、大會社の組織は元來經濟的にして且便利なるもなり、然れ

ども之を自然的發達にのみ放任し敢て監督するところなくんば徒に貧富の懸隔を造る一方法たらんのみ、

工業界に於ても亦然り、蒸氣電氣を使用する器械の發明後、大資本を有する會社及商館は盛に是等の器械を据へ付け、多數の工人を使用し、各自分業の方法に依つて勞働せしむ、故に其の産出價額は隨て多し、之に反して小資本を有する會社及個人的工場は充分なる器械を購求する能はず、又多數の勞働者を使役する能はざるが故に、産出額も隨て少なし、然れども費用の點に至りては大會社大工場に比して割合に多し、故に其の製造したる物品も比較的高價たらざるを得ず、此等の理由は小會社及び個人的工場の製造したる物品をして賣先を鈍からしむる所以なり、又小會社小工場は其の資本の小なるに因り、賣拂を急速に要するが故に度々損失を來



す。とあり、大會社大商人は然らず、資本に餘裕あるが故に利益の大なる割合に損失少し、是れ故に一方は伸長し一方は萎縮するに至る大工場の組織は有益有利のものなり、然れども其の有利有益なるを知るに共に其反動に注意せざれば之れ亦一の貧人産出の一方法たるに過ぎざるべし

其の他政府が妄に諸種の特許を富人に與ふるは益々彼等をして富を致さしむる者にして、商業上の特許、拂下の特許、會社の特許、工業上の特許等は皆な富をして少數人の手中に集聚するものなり、米國にある百萬弗以上の富を有する者は四千〇四十七人にして、内三千九百九十二人は特許の爲めに大資産を作りたのものなり、故に特許を少數の富者に與ふるは彼等をして益々富たらしむる所以にして、貧者をして益々貧たらしむる所以なり、近來米國に人

民黨起り、歐洲に社會黨起り、西東兩陸を通じて異口同音に特許の弊害を攻撃する亦た宜なる哉。

如此にして貧富の懸隔は日一日に甚しきを加ふるが如し、試に英米に於る富の不平均を見よ、米國に於て僅か十萬人の富は六千二百萬人餘の有なる富に等しく、二百萬人以上を有する紐育市の總富は僅に一萬人の富者に屬す、又合衆國統計官「ジヨーシ、ホルムス」氏の言に依れば、米國の富の二割は百分の三の人口の有にして、七割一分の富は百分の九の家族に依て有せられ、僅に二割九分の富は九割一分の人口の有なりと、之に依て見るに僅か一分の人口は實に米國の富の五分一餘を專有するものなり、又有名なる「ウヰリアム、アストル」氏が有する資産を作らんとするには一人の労働者が一日一弗宛貯蓄するも四十萬年を費すべく、「ジョン、ロツクフェ

ラー氏の資産を作らんとするには一日百弗宛にて働くも三千七百五十年を費すべし、富の平均ならざるや此の如し、又英國に於て一千八百九十年より九十五年迄に死亡したる人口の資産を取調べたる統計表を見よ、

階級	一人平均の富	死亡せる人数	死亡せる人口に對する人数の割合		階級の有する富	死亡の總富に對して階級の有する富の割合	
			人	割合		弗	割合
無財產者			四九,六四	五,七三			
五百弗以下の産を有せる級	二七,九五〇	九三,三六九	一一,三二	二六,〇九〇,〇〇〇	〇〇,七		
千五百弗以下の産を有せる級	九四,〇〇〇	九二,一七五	一一,二五〇	八七,九〇〇,〇〇〇	〇二,〇七		
千五百弗以上五千弗迄の産を有せる級	二四六,一〇〇	八七,五五六	一〇,八五一	二六,四〇〇,〇〇〇	〇五,一一三		
五千弗より五萬弗迄の産を有せる級	一六二,五二五	六四,三〇七	〇七,九五五	一〇,四七〇,〇〇〇	二四,六九三		
五萬弗より百二十五萬弗の産を有せる級	一六七,四三三,五〇	一三,七〇六	〇一,六九二	二,九四八,四四〇,〇〇〇	五,四三三		
百二十五萬弗以上の産を有せる級	二四七,七二七,〇〇	二七	〇〇,〇一八	五,一九九〇,〇〇〇	一三,三七		
平均及合計	五,三三,五〇	八,〇四四	一〇〇,〇〇〇	四三,三二五,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇		

此の統計表に依て見れば五年間に死亡したる英國人口の八割餘は僅に三分の富を有し、僅二割の人口は九割七分以上の富を保有せるなり、又死亡せる總人口の十分の九は僅に八分の富を有し、一割計の人口は九割二分強の富を有し、百分二弱の人口は實に六割七分半の富を専有せるものなり、  
富の平均を以て稱せらるゝ英米に於て已に此の如し、其他の諸國に於ける貧富の懸隔は知るべきなり、就中西班牙の如き、伊多利の如きは尤も甚しきものにして、余は嘗て友人なる一米人に聽けり、羅馬は華族と乞食の市場にして、金殿玉樓は巍々として能く人目を驚すも其の階下に蝟集する乞食を見るに及んでは一層驚きたりし、其の懸隔の甚しき貧人の多きは實に驚くべきものなれども、今や世界到處に此光景を存せり、獨逸に於ける乞食の數は殆ど二

十萬人餘、英國に於て一定の居住なきもの十六萬五千人、米國に在りて無職の貧人は四百萬人餘なり、此狀勢にして益々進まば世界は遂に富人政府を一方に造出するに同時に、又貧人市民の一方に造出するに至らん。

今日労働者が資本家に對し同盟罷工を起すは一方より論ずれば彼等は實に大悪人大罪人たらざる可からず、雖も又親しく彼等の境遇を観察し彼等の衷情を思はば全く理なきにも非らざるを知るべきなり、然れども貧富の相去る愈々遠きに隨ひ益々其數を増加するは實に政治上經濟上社會上の爲めに之を憂へざる可らざるなり、見よ歐米に起れる同盟罷工の數を、米國に於て一千八百八十一年より一千八百九十四年七月迄に起れる同盟罷工の數は實に七萬五千二百三十四回にして、此の人員は四百萬八千二百人

餘、佛國に於て一千八百九十四年より九十六年迄に起れる罷工は一千〇三十八回、英國に於て一千八百九十四年及び九十五年の二年間に起れる罷工數は一千九百三十七回なり、而して此等の同盟罷工は皆な貧富の間に生じたる小衝突にして、此の小衝突は是れ未來に生ずべき大衝突の風雨を豫示する晴雨計なれば、宜しく貧富の間をして圓滑ならむこそ今日の急務なり、貧富の一たび世上に發生するや、隨て兩者の懸隔を來し、兩者の懸隔は今や兩者の衝突と變じ、兩者の衝突は其の弊害を政治上社會上經濟上に及すに至れり、故に若し之が防遏の方法を今日に講ぜざれば、終に一國を擧げ亡滅に歸せしむるも計る可らざるなり、*「ダニエル、ウエヴスター」*云へり、富の聚結は國家の進歩を妨げ完全なる民主的精神を亡さんと、眞に爾り、之を已往の歴史に徴するも亦

此の感なき能はず、見よ僅に百分一の富人が國內の不動産を占有せし時に於て「ペルシヤ」の王國は亡びたるに非ずや、百分二の人民が九割七分の富を保持したる時に於て「エジプト」は滅したるに非ずや、又僅か二分の人口が一國の總富を有したる時に「バビロン」の王國は殞れたるに非ずや、一千一百六十人の富人が一國の富を專有する時に於て、嘗て光輝燦然たりし羅馬も蠻人「アフリック」の爲めに紀元後四百〇一年を最後として亡びたるに非ずや、思て茲に到れば富の不平均は實に一國の爲めに悲まざる可からざるなり、近來我國の如きも富の不平均甚しく、一方に民力を貪る貴族あると共に、一方に不遇を歎ずるの貧民あり、一方に國富の結合を計るの豪商あると共に、一方に貧困を悲むの労働者あり、一は絹布を纏て別荘に起臥し、一は襤褸を背負て市街に徘徊する者にして、嘗て

「ゴールドスマイス」が吟誦する貧民の宅地は富人の庭園と化し、富人の絹衣は貧者の涙にて織らるる云ふべき状態なれば、漸々兩者の衝突を我國に來すも、又遠きに非るべし、現に農商務省の報告するのみにても、明治卅年七月廿日より十一月十五日迄にて、同盟罷工の数は卅にして、労働者の數は五千人餘なり、是れ其の一端を示すものにして、是等の衝突をして益々盛ならしむるに至れば、其の弊害を兩者の間に止めずして延て及すこと決して少小に非ざるなり、故に苟も一國を平和に富強に維持せしめんことを欲せば、先づ富の配分に注意し、又貧富の間を以て圓滑ならしむべき方法を講ぜざる可らず、

### 第三章 産業的生存競争

宇宙を貫て一の動力あり、進化と云ふ自然の大法にして吾人の妨  
 遏又は統治し不能る所なり、日月の光輝を發し、地球の廻轉し、金石  
 の形狀を保ち、生物の繁榮するも偏に此の法に依るところにして、  
 之れなくんば生は亡滅し、地球は消失し、宇宙は昏沌たらんのみ  
 眼を放つて地球の表面を觀んか、地の東西を不問、洋の南北と不云、  
 草木となく禽獸となく、人類となく、或は自力に依り、或は他力を用  
 ひ生存てふ目的に向て忙々競争しつゝあるを知らん、之れ生物社  
 會に於ける進化の結果にして亦趨勢の然らしむる所なり、而して  
 此の競争に於て常に勝利を樂み發達を得る者は實に人類と云は  
 ざる可らず、

人類社會に於ける生存競争は數多の複雑なる原力に基因するこ  
 ころにして決して單純なる一原力に依て生ずるものに不有るな  
 り、則ち宗教的、原力、道德的、原力、政治的、原力、産業的、原力、の混織、基  
 因、ひて始めて全き人類の生存競争を生ずるものなり、余輩は此處に  
 産業的、原力より生ずる競争を名けて産業的、生存競争と云ひ聊か  
 此所に論ずるところあらんことす

人類社會に於て最も直接なる問題は生命の保存及子孫繁殖の問  
 題にして、經濟的物質即ち富に關係する所多し、故に産業的競争、換  
 言之を云はば富に向つての競争は人類社會に於て最も直接にし  
 て最も緊要なる競争と云はざる可らず、而して人類の生存を定む  
 るに四の必要なる情態あり即ち

#### (一) 自然的、給物(土地、氣候、空氣等)

- (二) 人類の性質、智力、体力、習慣、風俗等
- (三) 技術、科學の情態及經濟社會の組織
- (四) 過去に於て貯へたる資本

にして之れらは實に生存の安危を決する所のものなり、例へば豊沃廣大の地、氣候温和の處、諸事の便利と共に發達せる文學工藝を有する人民にして強健なる体力及智力を以て完全なる經濟社會に勤勉努力し過去に於て貯蓄せる大資本を運轉するものあらんか、之れ實に完備せる經濟社會に生存する經濟的人民にして彼等の生存は完全にして後來大に盛榮すべき望を有するものなり、然れども之に反し狭小なる瘠土に不完全なる文藝僅少の資本を有する人民にして不强健なる智力体力を以て常に諸種の不便と戦ひつゝあるものありとせんか、之れ一時の生存を保ち能ふ可きも

永遠には滅失の悲運を有する人民と云はざる可らず、之れらの情態は一見全く自然的發達にして人力の關係せざるが如く見ゆれども決して然らざるなり、殊に人民の性質、技術科學の發達、經濟社會の組織及資本の如きは皆自然の力を應用せる人類の知覺的行動の結果に外ならざるなり、獨逸人の勤勉なる、米國に於て資本の夥多なる、英國經濟社會の頗る完備せる、皆之れ各其國人が知覺的行動を以て然らしめたる所なり、亦自然の給物即ち土地及氣候の如きも或る點迄は吾人の知覺的行爲に依て改變する事を得るなり、例は荒漠たる沼地と雖或は人工を以て或は機械を以て之を開堀せば以て水運の便を造る可く不毛千里の地も或は鋤鋤を用ひ或は牛馬を驅つて之を開拓せば以て沃野豊田と變ず可く、朔風吹雪氷柱林立するの寒地と雖も周らすに高堤を以てし

藏するに火熱を以てせば亦棲住に適する處となす事を得るなり、故に此の生存に必要な情態即ち土地、氣候、資本、學藝、技術、智力、體力等の如きは吾人の知覺的行爲に依て生出又は改良する事を得るものなり、余輩は或る一派の哲學者及社會學者の如く人心を以て萬知萬能の神と信ずる者にはあらざるも人類の意識及行爲が實に偉大なる力を有する事を認知するものなり、産業的生存競争の目的は吾人の己に云へるが如く經濟的物質の占有にあり、而して今之を其の行はるゝ方法に依て細別せば左の如し

- (一) 人と自然との争
- (二) 人類相互間の争
- (三) 階級間の争

#### (四) 事業間の争

#### (五) 國民間の争

余は以下各種の争に於て少しく説明し而して生産的生存競争の性質を明にせん

一、人と自然との争 抑も人類が地球上に生出してより以來分時と雖自然に對する戦を罷めたる事なし、智力及体力の兩を以て或は氣候と戦ひ或は風雨と争ひ過去數十年間辛苦せる歴史を有するものは實に吾人々類とす、自然は元より積極的に懇切なるものにもあらず亦先天的に残酷なるものにもあらずなり、詩人「ブライアント」歌て曰く「何處ともなく我眺むる處に自然の笑あり」と、雖然如此は之れ詩的觀察なり、之を經濟的に觀察せば獨逸の「ゲーテ」が云へる如く、彼は粗暴にして溫和なり、愛にして恐なり、無力にし

て全能なり、過去と未來は彼れの知る所にあらず、彼れの永劫は只現在にあり、今例を以て之を云は、吾人が家屋を建築するに當り中心力の種々の場合に吾人を援くるが故に自然は誠に親切なるが如し然れどは同一の中心力は亦人をして高處より落下せしめ之を殺す事あり誠に不親切と云はざる可らず、吾人が帆を上ぐるの時風は來つて之を充たし船の進行を援くるも、同一の風は時に吾人が辛酸の結果たる諸種の財産を吹倒破潰する事あり、故に哲學的感念はあざ知らず、社會學的又は經濟的感念を以て解釋すれば自然は至つて無意無心なるものにして、吾人が之を應用するの法如何に依て或は親切となり或は殘酷なるものなり。或る人類學者の曰く「文明とは人類が獨力を以て自然と戦ふの愚を去り自然の力を利用して之と戦ふの情態を云ふ」と言甚だ奇なり。

り、雖亦眞理のなきにあらざるなり、往古の野蠻時代に於ける人類は未だ自然力の應用を知らず故に獨力又は僅かなる自然の援を以て生存を完ふせんせり、然れども人智の發達と共に自然の應用てふ事は随て生存の法甚だ容易となれり、古代の野蠻人は草を分け木に攀じ手づから禽獸を捉ふるの事をなせり、然れども今代の人は銃砲を以て遠く之を射殺す、古代の人は遠く谷を巨り河を越へて燈木を求めたるも今代の人は坐して電燈を用ふ之れ偏に人智の差のみ、今日吾人の有する漁車、漁船、電信工業機械、鐵橋、石家、瓦屋、衣服、其他苟も文明なる文字の下に存在する物一として吾人が自然力を應用して自然と應戦するの要具に不有るはなし。

二、人類相、互間の競争、強者は弱者を呑み優者は劣者を斃し、適者



は不適者に勝ちつゝあるは今日社會の常態なり、此處に於てか自然の無意無心は亦疑ふ可らざるなり、甲者は商に長ずるも乙者は之に迂なり、即ち甲者は數萬の富を致し乙者は破産して他の役する所となる、甲者あり發明心に富む乙者あり無學淺才なり即ち甲者は機械を發明し富と名譽の兩を樂み乙者は襤褸を纏ひ俯して路傍に勞働す、此の如きは枚擧に遑あらざる所にして余輩が特に説明するの必要なかるべし、勿論不完全なる今日の社會諸種の競争は悉く公平なるものと云ふ事能はざるなり、富者の子弟は勞せずして資本を得、非常の困苦を爲さずして教育を受け而して優々競争場裡に來るも、貧者の子弟は之に反し常に百難千苦の間に生育し僅少の資本と教育、否資本と教育の要具なくして競争場裡に來る、何ぞ競争の公平と云はん、然れども公平問題は暫時措て問は

ず社會に於て人類が相互に忙々奮争しつゝあるは拒む可らざるの事實なり

三階級の競争 人類界に於ける階級は經濟社會の發達と共に伴へる特種の現象にして、其性より之を論ずれば好事と云ふ可きも其及ぼす處より論ずれば亦一種の弊害と云はざる可らず、抑も歴史以前に生息せる人類の情態は今を去ること遠く且つ記録の存在せざるが故之を測知する事能はずと雖之を進化學に就て考ふるに往昔彼等が未だ一定の社會なるものを創設せず、浪々天地の間に彷徨して野蠻的生活を爲せる時代に於ては今日の如き各種の階級は存在せざりしが如し、然れども人文社會の進歩經濟組織の發達と共に分業の法熾に行はれ生存競争は愈激烈となり遂に今日の階級を生出するに至りたるが如し、而して此の階級の區

別益々甚敷なるに共に相互間の利害の相衝突するが爲め又は所謂階級的嫌惡の念生ずるが爲め各種の争となり紛擾を生じ遂に厭ふ可き弊害を見るに至る、勿論何れの階級に雖最終の目的即ち人類の完全社會の整備に於ては全然他の階級に其利害を一にせざる不可、雖今日の社會制度の不完備なるに各階級が其利害の他階級の利害と總合するを知覺せざるが故に或は私慾にあり或は害他となり、紛糾擾亂の禍を醸すに至る、即ち傭者と被傭者は常に生産の分配に就て相争ふ、傭者は可成的僅少の賃銀を以て多くの勞力を得んこと、被傭者は可成的僅少の勞力を以て多くの賃銀を得んこと、此所に於てか諸種の勞働問題亦現出す、

有産者と無産者との間には常に一種の争あり、即ち有産者は自己所有の財産を保存且増殖せんこと、無産者は之を奪ひ之を平均せんこと、遂に相闘争す、佛の「ブルードン」が「財産は掠奪物なり」と叫びたるも獨の「カール・マルクス」が「萬國の無資産者よ、起つて同參せよ」と云ひたるも皆之れ無産者が有産者に對して發せる宣戰の言に外ならざるなり、彼の熱血愛國者「カシュユ」の力に依て起されたる「オーストリア」の内亂も、「ワッタイラー」の手に依て戰はれたる英國の内亂も、「ロベシピア」「ダントンの佛國革命も皆之れ無産者が有産者の壓制を彈返し而して其地位を高めんと企てたる結果のみ、組織されたる勞働者と組織されざる勞働者は資本家に對する手段、賃銀及勞働時間等の問題に就き往々相争ふ事あり、組織的勞働者なる産業組合勞働組合共力組合等は組織の法に依り一團の勢力を作り共心的運動を以て資本家に當り、共和的方法に依り諸種の勞働問題を決せんこと、無組織の勞働者は組合等の如きに自己の

自由を委ぬる事なく個人的に進退せんことす。此處に於てか兩者の間甚だ密和ならず、外に向て發す可き勢を以て内に相争ふの悲事を見るに至る。一千八百九十三年米國に於ける鐵道工夫大同盟罷工の時の如きも一千八百九十九年ペンシルヴァニア州に於ける鑛夫同盟罷工の時の如きも、勞働組合員と組合に屬せざる勞働者の間に甚敷葛藤起り双方血を流して奮闘したることあり。人種的感情は政治界に於けるが如く産業界に於ても亦勢力あり。即ち加奈多の漁場に英國人は佛國人と競び、墨國の商界に於て獨逸人は米國人と争ひ、布哇の砂糖園に日本人は支那人と相反目すと云ふが如し、尙一國々内と雖數多の異人種雜住する場合には此人種的産業競争の行はるゝを見べし。米國は各國人種の雜住する所なり、故に其南方諸洲の鑛山に於て匈牙利人と伊太利人の競ひ、

加洲の農園に於て日本人と支那人の争ひ、シカゴ、紐育の市場に於て英獨人の米國人と競争するが如きを見る。次は消費者と生産者との間の競争なり、生産者は貨物を安直に生産して之を高價に賣り以て利の多からんことを計り、消費者は少額の價を以て多くの貨物を得以て益の多からんことを望むものなり、例へば砂糖製造者は安價なる原料と勞力を以て砂糖を製造し市場に於て之を高價に賣らんことし消費者は此の如き製造者の希望に反對して可成的廉價に之を買はんこと欲するなり、近來英米に於て喧傳されつゝあるトラスト問題の如きも實はトラストなる生産者が獨占權を有するが故に賃銀を下げ物價を上げ公共を壓抑して自らの利潤を多からしむるものとなして世人が之を攻撃せるに基因するものなり。

四、事業間の競争 同性質又は類似の事業の間に競争あるは普通の事にして鐵道會社は鐵道會社と競ひ、石油業者は石油業者と争ひ又瓦斯會社は電燈會社と争ひ、木材業者は石材業者と争ふが如し

次は事業の組織如何に依て競争を生ずる事之れなり、手工は機械と、單獨事業は會社と、共同業は監督業と、組合は株式會社と競争するものなり、英國産業革命時代に於て又は我國に始めて機械の輸入されたる時代に於て如何に手工と機械及單獨事業と會社が激烈なる競争をなしたるや、吾人の夙に知る所なり

此の外に資本的競争即ち大資本と小資本との間に競争あるなり、諸種の事業に於て大資本は常に小資本を倒さんとし、小資本は全力を注て此の噬食を免れんとし、大資本は資本の力に依て小資本

を壓せんとし、小資本は熟練敏活等に依て大資本に勝たんとし、此の間に競争を生ず

五、國民間の競争 國民間に於ける産業的競争は戦争、關稅、獎勵金、下附等なりとす、古來各國の間に行れたる戦争は政治的原因に基くもの多し、然れども其經濟的原因に基くものもなきにあらざるあり、英清の鴉片戦争、英佛の海上戦争の如き主とする所は經濟的利益にありたるなり、亦近年の日清戦争、西米戦争及英杜戦争等の如きも仔細に之を觀察せば或る經濟的原因の存せるを知る可きなり、平和の時代に於ける國家の産業的競争は關稅、獎勵金、下附等の方法に依て行はる、例へば獨逸及米國等が外國の輸入品に對し重稅を課し、英國が嘗て其商船に獎勵金を下附し、日本が製茶輸出品に獎勵金を與ふるが如きは皆之れ國家が其國民を扶助して他

の國家と産業的競争を行ふものと云はざる可らず  
 以上畧述するところは所謂人類産業的生存競争なりとす余輩は  
 單に社會に現はるゝ事實を記述し以て産業的生存競争の何たる  
 やを示し、此處には其何れの競争の有益にして何れの競争の有害  
 なるやを論ぜざるなり、然れども全體に於て生存競争は實に進歩  
 の原因文明の大法なり、之れ無んば人類は退化し社會一切の事物  
 は沈滞す可し、雖然亦之れを無心無意なる自然の爲すがまゝに放  
 任せば諸種の弊害は滔々として生じ遂に人類の自滅を招くに至  
 らん、故に社會の學に志すものは先づ社會に現はるゝ諸種の現象  
 及び其の及ぼすところを仔細に研究すべきなり

#### 第四章 國家と勞働問題

人文の進歩と共に社會は益々繁雜となり、個人は愈々社會的となり、隨  
 て國家も亦其形體を改變し、活動の範圍を擴張するに至るは、之れ  
 自然の結果にして、當然の進化なり、今にして國家を無視し之が行  
 動を非認せんとするは、之れ過去の歴史を知らず現在の必要を見  
 ずして未來を暗中に投ぜんとするものなり、極端なる個人主義又  
 は無政府主義を保持する人は、國家を以て全然不必要のものとな  
 し論じて曰く、完全なる社會に於ける完全なる人民は、自己の權利  
 と自己の義務に依りて萬事を處理するが故に、敢て國家又は政府  
 の力に依頼するの必要あることなし、政治的、經濟的、宗教的等凡て  
 個人を抑壓する權力の全廢されたる時に於て、始て完全無缺の社  
 會を造り最幸の個人を見ることを得るが故に、國家の頽亡權力の  
 消失は人類幸福の天頂なりと、言甚だ奇、義甚だ妙なれども、之れ社

會現時の情態を無視し、一飛直に月に奔らんとするものにして、殊に人類を以て權威なくして、完全の域に達することを得るもの、誤想せる議論なれば、到底吾人の首肯し不能る所なり、無政府主義或は極論なる個人主義は元來一の理想に不過と云は、可ならん、雖然理想には正當の道理と順序無かる可からず、換言して之を云へば來る事ある可しこの信を置くに足る可きものならざる可らざるは前章已に論じたるが如し、徒に數十年後の事を理想して今日の實情に意を留めず、進化の大法たる順序と法則を不顧して盲進するものは、先づ失敗に終るものと云はざる可らず、抑も國家の起源は遠く數千年の前にありて、之に關する詳細は到底測知す可からず、雖、國家其もの性質より推すも、人類が一定の社會を組成し、權力の必要を感じたる時に起りたるは、亦疑ふ可

からざるなり、「ボスアス」、「ルーソー」等は之を民約にありと、(Natural Man)が他人と結合するの利益あるを悟り、相互に契約して國家を組成せる者なりと、したるも、之れ事實に反し、歴史に依て證し得べからざる附會の説と云ふ可きなり、人類は「アリストートル」が云ふが如く政治的動物なるが故に、集合して團體を組織するものなり、而して國體の生出さるるに共に、之れが存在及活動の爲に權力の必要を生ずるは必然のこゝなり、人類の集合するや其數の多少を不問、其團體の大小に不拘必ず、内治と外物攻襲防禦の爲に團體的動作を要し、團體的動作は或る場合に於て各人の絶對的自由を抑束せざる可からざるが故に、權力殊に主權の必要を生じ即ち國家を組織するに至るものなり、即ち國家の起源は、權力の必要にあり、然り而して組織されたる國家が其權力を用て爲す可きの

事は如何、換言して云へば國家の効用は即ち如何、往昔の時代に於ては國民の生命財産及利益の保護之れなり、古代若しくは中世紀に於ける國家は其權力時に甚だ壓制的なりしにも拘はらず、其活動の範圍は甚だ廣からず、其職務の重なるものは戦争其他外敵に關する事及國民の財産に關する事等にして、商工の如きには自ら立至つて其權力を充分に用ゆるの事を爲さず、國家は單に人民の保護を以て職務を爲し、利益の増進の如きは間接に之を爲したらんにも之を以て國家至當の義務として直接に努めざりしなり、然れども近世に至て國家は漸く其効用の範圍を擴張し、殊に商業に關しては幾分の干渉を爲すに至りたるも、政府壓制の激甚なりしが爲め干渉の結果は、却て弊害を生じ、其反動として十八世紀の過半期殊に十九世紀の始に至り、過激なる個人主義興り大に政府

權力の過大を論じ、當局者者の壓制を駁撃して國家義務の縮小を唱え、其の結果として國家は一時以前の簡單なる保護的國家となり、之れ元より司政者の專政抑壓より生ぜる反動にして、其當時の有様より考ふるも至當の事と云ふ可きなり、雖然事物の變移と社會の進歩は、國家をして單純なる保護者としてのみ存在する事を許さず、即ち國民の保護と共に之れが福利の増進に向て努むべきを要求するものなり、

論者或は言はん國民福利の増進とは、國民の生命財産及利益の保護と同意味のものにして、語に於て異なるところあるも其實に於ては相同じし、然れも之れ決して然らざるなり、保護とは既に在る物を保ち護るを云ふの義にして、増進とは未だ在らざる物を造出するを云ふの義なれば、兩者は全く其意味を異にするものなり、而して

國家が國民保護の外に福利増進を以て爲す可きの義務を認め、力を之に致すに至りたるは實に近年然かも十九世紀の後半期の事にして、重に經濟事情の變移に基けることなり、近年諸産業は大に發達し、事業は凡て巨大になりたること共に、微たる個人の力は能く之を整理監督し、之より生ずる弊害に向て畫策する不能、故に必要は自然に國家の職分を擴張するに至れり、必要は實に權利を生ずるものにして、國家が或事を爲すこと不爲ることの權利は此の必要の如何に依るものなり、國家は之を爲す權利あるも彼を爲すの權利なしとて、國家の權利と職分とを先天的に斷定する者あれども、之れ誤の甚しきものなり、元來國家の權利の如きは一種不動にあらずして、必要に依て定む可きなり、即ち國民一般に向て利益ある場合の如きに於て、國家は正に活動の權利を有すべきなり、余輩は

或る急激なる社會黨及共產黨と共に、國家を以て唯一の目的となし、全く個人を無視し、自己行爲の凡てを商工農の悉くを國家に委託せんとするものにあらず、然れども過去の歴史に鑑み、今日の事情を察し、國家職務の必要上擴張せざる可からざるを信ずるものなり、否事實に於て擴張されつゝある權利を是認する者なり、國家の權利及職分の擴張は以上述べたるが如し、而して其擴張されたる且擴張さる可き方面は余輩が前に少しく述べたるが如く、經濟の方面にあるは疑ふ可からざるなり、抑も經濟社會の發達は一方に於て資本を増加し之が勢力をつくり、他方に於ては勞力の必要を生じ之れが權力を大にす、而して兩者其性質を異にし其利害往々相同からざるが故に、或は衝突し或は紛争し、其結果として諸種の弊害は現出す、眞に嘆ず可きあり、唯然現出するの弊害を以



て數の免れざる所となして之を放任し、其原因を探究せず之れが防止を計らざる者は、己に向て其義務を盡さざるに共に社會に向て不親切なるものと云はざる可からず、之れ獨り個人に對して言ふ可きのみならず、亦國家に對して言ふ可きなり、獨逸政府が嘗て労働保險法を其議會に提出するや、其説明の第一に曰く、貧者救済の事は之れ單に國家が道德上爲す可き義務を有するのみならず、實に國家存在の爲めに必要なり、云々、余輩は各國政府が能く獨逸政府と同じく經濟的義務を認識し、殊に労働問題に關して力を致されん事を希望するものなり、

今日産業社會の情態を見るに、會社組合等は漸く個人資本家の地位を奪ひ、隨て有形なる個人が責任を以て労働者を使役するが如きこと消失し、責任少なき無形的會社之に代るが故に、資本家と労働者との間に存せる胎蕩たる關係は變じて商業的となり、前には情

を以て與得せるも、今は金錢を以て之をなすに至るが故に、一朝恐慌來り又は商業不振となるが如き場合には、會社は直に生産を中止し、労働者を解傭し、敢て彼等の苦境に陥るを憐察せざるなり、此處に於てか幾萬の工人は忽に變じて無職者となり、一家舉て飢餓の苦難を見るに至る、無職は時に或は屈して妻子の咽泣をあり、或は發して労働者の暴行となり、之より生ずるの弊害は實に多く枚舉し盡す可らざるなり、豈恐る可きにあらずや、然れども此の如きは單に一例のみ、此の他産業革命以來機械の使用大に増し、殊に電氣蒸汽の應用益盛になりたるに共に、危険なる機械は發明され、注意保護到らざれば災過其數を増すが如き、或は一工場にして數千の職工を使傭するが如き場合に、衛生法取締法の不注意なるより、

悪疫發し道徳敗れ社會全體を害するが如き、或は同盟罷工の結果數千の工夫亂行を逞ふし、機械を破損し鐵道電信を壞ち、資本家も亦無頼の徒を集めて攻守せしめ、遂には流血積屍快樂の基たる富の生産場を變じて、慘憺たる修羅場となす等の如きは吾人が日々見聞する所なり、然れども資本家も労働者も全力を注いで之に備へる事を爲さざるなり、否、備ふる事能はざるなり、經濟上起る處の弊害や其根底甚だ深く其勢猛烈なるが故に、微たる個人の力の能く之を妨遏若しくは掃去し不能るなり、例之は労働者の教育は社會一斑を益すると共に、自己の爲にも必要なるを認知する資本家ありとするも、事重大にして多額の費用を要するのみならず、直接の利益を見る事能はざるが故に、之に向て力を致さざるなり、又工場法は自己存在の爲め社會改良の爲に必要なを知るに雖、法律の

力なきが故に労働者は之を制定すること不能るなり、故に産業界の弊害を防止し、労働者の環象を變じ、以て有益なる労働者に責任を重んずる資本家を造るは、國家の爲す可き當然の職務と云はざる可らず、之れが爲に國家は法を制し例を定め、或は調査會を組成し、或は官署を設け充分に努む可き權利と義務を有するものなり、國家の産業に關係するは個人の自由意志を束縛し、政府に過當の權利を與ふるが故に甚だ危険なるものにて、文明の發達は爲に阻害されべしとて排斥する者あり殊に「スペンサー」氏の如きは之を以て恐る可き軍制的壓制なりとて大に攻撃するに雖、之れ今日の實情と必要を不察る議論と云はざる可らず、論者にして辯難するも可なり、攻撃するも可なり、然れども經濟的弊害の滔々として現出し、渺細たる個人の勢力之を防止し不能るに於ては、國家に依頼

せざる可らざるを如何せん、況んや國家の目的は實に國民の險にかゝるものを救済し、其未だ危に臨まざるものを抑止し、而して國民の多數を以て幸福ならしむるに於てをや、  
終に臨て一言せんご欲するは労働局設立の一事之れなり、即ち我國にも一個の獨立なる労働局を設け、之をして全く政黨以外に立たしめ、此處に學識あるものご經驗あるものごを集め、労働及資本に關する重要な問題を取調攻究せしめ、一方に於ては其の取調の結策を政府各官署に給し、且必要ある場合には労働及資本に關する法律の制定を建言せしめ、他方に於ては出版の方法に依り一般の公共をして全國労働の情況を知らしむる事之なり、事元より新なりご雖、敢て多くの人員ご經費を要せず、其効の却て偉大なるは亦疑ふ可らざるなり、産業發達の今日此の如き局の設立は實に

緊要なることにして、之に依て益せらるゝ所は獨り労働者及資本家のみならず、一般の公共に於ても亦然り、

## 第五章 世界の人口

千七百九十八年に英國のマルサス氏が始めて人口論を唱へてより以來忘却せられたる人口問題に大に學術社會を聳動し世人の注意を引くに到れり  
抑も人口論の必要なれは經濟政治社會學上明かなる所にして今更に喋々さるゝの要なし故に此處には單に統計表數個を掲げて事實的に世界の人口を論ずることあるべし、勿論統計表の如きは統計作者ご統計時期に隨ひ多少異なる所あり、故に統計の方法如何等を悉く了知するにあらざれば精確なるものごして信ずる事不

能然れども以下掲ぐる所は歐米學者社會にて精確に近きものとして信用せらるゝものなれば之に依て立論するも別段大なる誤りなかるべしと信ず

統計者	年	人口
レブアサー	一八八六	一、四八三、〇〇〇、〇〇〇
ラプエンスタイン	一八九〇	一、四六七、九二〇、〇〇〇
ワグナー及スパン	一八九一	一、四八〇、〇〇〇、〇〇〇
ジュラシユツク	一八九三	一、四八五、七六三、〇〇〇

「シユラシユツク」氏の統計に依れば世界最近の人口八十四億八千五百萬以上にして之を大陸に依て區分すれば

國名	人口
歐羅巴	三五七、三七九、〇〇〇
亞細亞	八二五、九五四、〇〇〇
亞弗利加	一六三、九五三、〇〇〇

亞米利加	一、二一、七一三、〇〇〇
オースタラリヤ	三、二三〇、〇〇〇
オシヤニアツク諸嶋	七、四二〇、〇〇〇
北氷洋諸嶋	八〇、〇〇〇

此の表に依れば亞細亞は實に世界の人口の二分の一餘を有し歐羅巴は四分の一計り又北氷洋諸嶋は僅に八萬人を有す考ふるに亞細亞は古昔人類發生の地にして殊に氣候は概して溫和又人類不住の砂漠の如きもの少きが故に多くの人口を有し北氷洋の如きは氣候至つて酷にして地は瘦せ食物不足なるが故に僅少の人口を有するなり雖然八億二千五百萬の人口より日本國の人口四千三百萬計りを引去りたる七億八千餘の亞細亞人は悉く頑蒙不明の半開人にして僅に三億五千萬内外の歐洲人の爲めに常に壓服されつゝあるは豈驚くべきにあらずや

國名	シオグラフィシ、アルマナック、デゴステーツマンズ タベレン(獨逸)			サ(佛國)			エアブツク(英國)		
	一八九三年	一八九七年	一八九七年	一八九七年	一八九七年	一八九七年			
支那帝國	一八九三年	一八九七年	一八九七年	一八九三年	一八九七年	一八九七年			
大英國	三五九、七五〇、〇〇〇人	三五七、二五〇、〇〇〇人	四〇二、六八〇、〇〇〇人	三五九、七五〇、〇〇〇人	三五七、二五〇、〇〇〇人	四〇二、六八〇、〇〇〇人			
魯西亞	二五二、三七四、四〇九	三六〇、八〇〇、〇〇〇	三八三、四八八、四六九	二五二、三七四、四〇九	三六〇、八〇〇、〇〇〇	三八三、四八八、四六九			
佛蘭西	壹一六、八一三、七三一	一二一、四一五、八二八	一二九、五四五、〇〇〇	壹一六、八一三、七三一	一二一、四一五、八二八	一二九、五四五、〇〇〇			
合衆國	七六、五九四、四三五	七九、一五三、一二九	七〇、四六七、七七五	七六、五九四、四三五	七九、一五三、一二九	七〇、四六七、七七五			
獨逸帝國	六二、九七九、七六六	六二、九八二、二四四	六二、九七九、七六六	六二、九七九、七六六	六二、九八二、二四四	六二、九七九、七六六			
埃太利及匈牙利	五五、六五八、七九四	五九、三五三、八九四	六二、八七九、九〇一	五五、六五八、七九四	五九、三五三、八九四	六二、八七九、九〇一			
日本帝國	四三、二二三、〇七三	四一、三八四、九五五	四一、三五八、八八六	四三、二二三、〇七三	四一、三八四、九五五	四一、三五八、八八六			
チザラント	四〇、四五三、四六一	四一、八一〇、二〇二	四一、八一三、二一五	四〇、四五三、四六一	四一、八一〇、二〇二	四一、八一三、二一五			
土耳其	三六、九一〇、三四五	三九、二五二、一五一	三八、八五九、四五一	三六、九一〇、三四五	三九、二五二、一五一	三八、八五九、四五一			
土耳其	二一、一八三、二九九	三六、九〇〇、〇〇〇	三九、二二二、〇〇〇	二一、一八三、二九九	三六、九〇〇、〇〇〇	三九、二二二、〇〇〇			

此く佛國の統計と英國の統計は同年間に調製されたるに不拘多少の差異あるは余輩が始に云ひたるか如く免るべからざる事なり

地球上最大の人口を有するは支那帝國にして其次は大英國、第三は魯國にして以上の三國は共に一億以上の人口を有する國なり。政治統計上強國と云ふは三千五百萬以上の人口を有する國のみを云ふなり故に世界に於て人口上強國たるべき資格を有するは支那、魯國、獨逸、合衆國、佛國、埃多利、匈牙利、土耳其及日本の九ヶ國なり。

歐洲各國の人口を見るに

國名	人口	國名	人口
獨逸	四九、四二四、一三五	丁抹	二、二七二、一〇五
佛蘭西	二八、二一八、九〇三	瑞典	四、七七四、四〇九
埃多利及匈牙利	四一、二八四、九六六	諾威	一、九九七、一七六
瑞西	二、九三三、五三四	英國	三七、八八八、一五二
波蘭	四、五五八、〇九五	西班牙	一七、二四六、六八八
白耳義	六、〇九三、七九八	葡萄牙	四、三〇六、五五四

伊多利 三〇、一五八、四〇八  
 歐羅巴土耳其 五、六〇〇、〇〇〇  
 ルーマニア 五、〇〇〇、〇〇〇  
 の如くにして、一千萬以上の人口を有するは魯國、獨逸、奧多利及匈牙利、英國、西班牙及伊多利の七ヶ國にして最大の人口を有するを魯國とす又最小の人口を有するは諾威なり、此の如く各國人口に甚しき差異あるは人種、歴史、經濟、氣候、土地、衛生、政治等に關係多くして余輩も今各國に就て説明すること不能なるなり  
 今人口稠密の度を調ふるに

國名	萬哩ニ住スル人口	國名	萬哩ニ住スル人口
歐洲	九五、四〇〇人	オーストラリヤ	一、〇〇〇人
亞細亞	四九、二〇〇	海洋諸島	一、〇〇〇
亞弗利加	一二、九〇〇	北永洋諸島	〇、〇四六
亞米利加	七、七〇〇	世界平均	二八、三〇〇

の如くにして歐洲は人口最も稠密なる處にして一方哩に九十五

人以上あり、之に反して此<sup>北</sup>永洋諸島は一方哩に僅に一千分の四十六人計りなり、又世界の平均稠密は二十八人とす  
 人口稠密に此の如き差異あるは土地及氣候に關係する所甚だ多し  
 人口の稠密を國に依て區分すれば

國名	一方哩ニ在ル人口	國名	一方哩ニ在ル人口
獨逸帝國	三三五人	諾威	一五人
瑞典	一八六	英國及愛蘭土	三二一人
奧多利及匈牙利	一七一	佛蘭西	一八三人
波蘭	三五七	西班牙	九〇
白耳義	五三六	葡萄牙	一二四
丁抹	一四八	伊多利	二七二
瑞典	二八	希臘	八八
歐羅巴土耳其	八三	支那	二三二
サルウイア	一一六	日本帝國	二八四
ルーマニア	九八	合衆國	二一

歐羅巴魯西亞	四九	魯西亞	一六
フィンランド	一五	ブラジル	五
印度	一九七	アージエンティン	二

即ち白耳義は最も稠密せる人口を有する國にして一哩に五百三十六人を有し次は彼蘭土第三は獨逸にして支那日本の如きは世人の想像するが如く稠密なる人口を有せざるなり日本の如きは一方哩に二百八十四人を有し恰んど伊多利同じ此の表に依れば一方哩に僅に十八人以下の人口を有するはブルシル、アーシエン、ティーン及び他の南米の小國なり

此く調べ來り此れを地圖上に於て見れば人口の稠密は伊多利に始まり獨逸に行き白耳義、ホーランドより英國に移り愛蘭土に止るなり又合衆國に於ける人口の稠密は太西洋岸マサチューセツ州邊より始まり紐育、ニューシヤルシーに行きインディアナ洲、イリノイ州

よりミッシンピー河を渡つてキヤンサス、ルイジアナ洲に止るなり、人口稠密は多く海邊に始まる。雖富饒なる原野、金銀、石炭、鐵鑛、商工業上の便利(港灣河水等の如し)等に依つて定めらるゝこと多し、又世界人口の増加を見るに

世界人口表

年	人口	年	人口
一八七二	一三七七、〇〇〇、〇〇〇人	一八七六	一、四二四、〇〇〇、〇〇〇人
一八七四	一三九一、〇〇〇、〇〇〇	一八七八	一、四三九、〇〇〇、〇〇〇
一八七五	一三九七、〇〇〇、〇〇〇	一八八〇	一、四五〇、〇〇〇、〇〇〇
一八八二	一四三四、〇〇〇、〇〇〇	一八九一	一、四九一、〇〇〇、〇〇〇

の如くにして一千八百七十二年より一八九一年迄十九年間には一億一千四百萬の増加ありたり、之を平均すれば即ち一年に六百萬人の割合なりとす

歐洲各國に於ける人口増加表

歐洲各國名	一八〇一年	一八九二年
歐羅巴魯西亞	四〇、〇〇〇、〇〇〇人	九三、七〇三、三三一
佛 蘭 西	二六、八〇〇、〇〇〇	三八、二一八、九〇三
獨 逸	二五、〇〇〇、〇〇〇	四九、四二四、一三五
埃多利及匈牙利	二五、〇〇〇、〇〇〇	四一、三 八、九〇三
伊 多 利	一七、五〇〇、〇〇〇	三〇、一五八、四〇八
大英國及愛蘭土	一六、三〇〇、〇〇〇	三七、八八八、一五二
西 班 牙	六、〇〇〇、〇〇〇	一七、二五六、六八八

即ら一八〇一年あり一八九一年迄九十年間に於ける歐洲人口の増加は甚だ多からざるなり之れ偏に歐洲國諸の間に大戦争多かりしが故ならん此の間に二倍以上増加せるは魯西亞大英國及西班牙のみならず而して最も増加の少なりしは佛國にして一年の平均僅に十二萬六千八百七十六人計なり、佛國は元來人口不動の

國として有名なるものなれば増加の割合の少なきは敢て怪むに不足るなり、

「マルサス」氏は人口は天性に基きたる順境にあれば毎二十五年に一倍すこ云ひたるも歐洲に於ける人口は決して然る速かなる割合を以て増加せることなし、之れ順境にあらざりしが故乎尤も合衆國に於ては一七九一年に僅に三、九二一、三二六の人口を有せしも一八九五年には六二九七六六に増加し百年に五千九百萬以上の増加ありたり、又、佛國の「レヴァアッサ」氏の調ふる所に依ればジャバ島の人口は三十五年間に四倍増加せり、此の如く或國に於ては二十五年間に一倍又は一倍以上増加せるも或る國に於ては決して然ることなし、兎角世界の平均に依れば人口増加は「マルサス」氏の云ふが如く二十五年亦は三十五年間に一倍せざるが如し、



今統計上より考察するに通例文明國に於ては人口常に増加し劣等の國に於ては減滅の傾あり、獨逸に於ては一八七一年より一八八九年迄十八年間に二割四厘強の増加ありたるも愛蘭土に於ては一八八一年より一八九一年迄十年間に九分の人口減じたり

生死表(一千八百七十一年より一千八百九十年迄英國政府の統計に依る)

國名	出生ノ割合率	死亡ノ割合率	國名	出生ノ割合率	死亡ノ割合率
匈牙利	四四、〇	三三、七	英國及ウエルズ	三四、〇	二〇、三
獨逸	三八、六	三〇、六	大英	三三、六	一九、九
波蘭	三五、二	二六、〇	丁抹	三一、七	一九、〇
伊多利	三七、三	二八、六	白耳義	三一、〇	二一、四
蘇格蘭	三三、六	二〇、四	諾威	三〇、七	一六、九
瑞西	二九、四	二二、一	瑞典	二九、八	一七、六
愛蘭	二四、九	一八、〇	歐洲各國ノ平均	二三、〇	一一、六
佛蘭西	二四、六	二二、八	衆國	二六、六	一三、九

割合とは人口千人に對する割合なり

出生及死去の割合の最も多きは匈牙利にして次は獨逸なり、歐

洲の平均を見るに出生の割合は其人口の三割三分にして死亡の割合は二割二分六厘なり、故に三割三分より二割二分六厘を引き去りて残りたる一割四厘は即ち歐洲人口が十九年間に増加せる速力なり

此の十九年間に獨逸に於ては一割二分、大英國に於ては一割二分七厘、佛國に於ては一分八厘の人口増加ありたり、

出生及死去は何が故に此く各國に於て異なるや人種、氣候、社會制度、衛生等に關係する所多かるべきも未だ學術上一々之を説明すること不能るなり、

男女人口の割合を見れば

男一千人ニ付女數  
オースタラリヤ 八五二人

男一千人ニ付女ノ數  
歐羅巴 一、〇二四人

亞細亞	九五八	合衆國	九五三
亞弗利加	九六八	日本國	九八〇
亞米利加	九七三		

の如く男一千人に付女の數一千人以上即ち女の多きは歐羅巴のみにしてオースタラリヤの如きは女の數僅に八百五十二人なり又歐洲各國に就て之を見るに

歐羅巴諸國	男子一千人ニ付女ノ數	歐羅巴諸國	男一千人ニ付女ノ數
諾威	一、〇九一人	愛蘭土	一、〇二九人
蘇格蘭	一、〇七二人	波格蘭	一、〇二四
瑞典	一、〇六五	匈牙利	一、〇一五
英國及ウエルス	一、〇六四	佛蘭西	一、〇一四
瑞西	一、〇五七	白耳義	一、〇〇五
丁抹	一、〇五一	伊太利	九八九
換多	一、〇四四	サルヴィア	九四七
獨逸	一、〇三九	希臘	九二九

女の數男子より少きは伊多利、希臘、サルヴィアの三國のみにして

他の諸國に於ては女子の數男子の數よりも多し、此くの如く文明國に於ては女子の數男子の數よりも多し、合衆國は例外なり、何んとなれば建國以來未だ二百年を出でず、事物全く靜定せざればなり、今試に合衆國を統計區部に依て調ぶるに

合衆國	男一千人ニ付女ノ數	合衆國	男一千人ニ付女ノ數
北太平洋部	一、〇〇五人	南中央部	九六一人
南太平洋部	一、〇〇四	西部	六九一人
北中央部	九二八		

にして太平洋岸部即ち久しき以前より英國植民たりし所に於ては歐洲の文明國と同じく女子の數男子の數よりも多し、歐洲諸國に於て女子一千人の出生及死亡に對し男子の出生及死亡の數を調ぶるに

國名	女子一千人ノ出生ニ對スル男子ノ出生ノ數	女子一千人ノ死去ニ對スル男子ノ死去ノ數
伊多利	一、〇五八	一、〇六〇

埃多	一、〇五八	一、〇八〇
佛蘭西	一、〇四六	一、〇七〇
獨逸	一、〇五二	一、〇九〇
波蘭	一、〇五五	一、〇四〇
白蘭	一、〇四五	
蘇格蘭	一、〇五五	
愛蘭	一、〇五五	
英國及ウエルズ	一、〇三五	一、〇七〇
マサチューセツト州	一、〇三六	
コンネクティカット州	一、〇四六	
ロードアイランド州	一、〇七二	
合衆國	一、〇四九	
瑞典	一、〇五五	一、〇八〇

七十二

にして男子の死亡と出生は共に女子の出生及死亡よりも多し、然れども女子に對する男子死亡の數は女子に對する男子出生の數よりも多きが故に女子の數は男子の數よりも多し、今男女人口差異の原因を調ぶるに生物學上より之を細密に知る

こと不能るも先づ事實に就て考ふれば實に左の如し、  
 第一氣候溫暖の處には女子の數多く寒冷の處には男子の數多し、蓋し寒國に於ては男子の身軀強健なるが故に女子よりも生存し易し、第二半開野蠻の國に於ては男子の數常に女子の數よりも多し、之れ野蠻の生活には腕力の必要等多きが故に女子に適せざるが故なり、  
 第三社會の進歩事物の進化は共に女子の生活に便益多きが故に文明國に於ては女子の數多し  
 第四移民及植民は一國男子の數を減じて女子の數を多からしむることあり愛蘭、匈牙利等に於て男子の數多からざるは之れが爲なるべし  
 第五世界各國に於て男子の出生及死亡は共に女子より多く特に

男子の死亡は少年者に多し

七十四

## 第六章 商業と道德

農工商は國家の三大基礎にして之れが盛衰は實に其の命運に關するものなり、而して農工兩業共に生産の業にして之れが發達するに否は交易の業たる商に依るところ多し、殊に往昔の町村經濟は變じて市經濟となり、市經濟は國家經濟となり、國家經濟は今日變じて萬國經濟たらんとする今日、否已に萬國經濟となれるや一變して萬國經濟たらんとする今日、否已に萬國經濟となれる今日商業の必要なるは亦言を要せざるなり、假令農産物は積んで山をなす可きも、商にして的當なる分配をなすに非れば一處に停滞して腐朽し去らんのみ、工場は積んで岳の如くなる可きも、交易の道なければ空國として消滅し終らんのみ、此處に於てか

二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百

昔日世人が擯斥したる商業も經濟社會の發達、生産の増加と共に追々其必要を増し遂に至重の業となりたるは亦怪むに不足なり

然り而して商業の盛衰に關して最も勢力ある者は實に道德なり一國商業の發達は勿論其國の地勢、歴史、産物及國民の性質等に依りて定めらるゝものなれども其國商人の道德にして高からざれば之等の情態にして如何に便宜なる可きも其國の商業は決して發達せざるものなり、世人の或るものは商業を以て全く道德と關係なきもの否相反するもの如く思ふが如きも之れ誤の甚敷もの云はざる可らず、勿論商業は慈善事業にあらざれば利得なしに物品を與へ去り他のみを益すること云ふ事ある可からず、殊に市場廣まり先方の誰なるやを知るこそ不能、生産物増加し如何に或種

の産物が先方を利するやを知ることは能はざる今日、交換の度毎に一々委細を調ぶることは到底能はざるの事なり、然れども如何に交換の品物増加し賣買の方法繁雜になれる世なればこそ、單に私利のみを目的とし需用のある處必ず價ありて實價なき偽物を賣り付て利益を貪るが如きは商の眞の目的に反するものなり、商の眞の目的は掠奪にあらず、偽取にあらず、交換及買賣の方法に因り有無相通じ、以て相互の利益と援助を得るにあり、故に道德とは常に密接の關係なかる可らず。

近來歐米の商人にして我國商人と取引をなす者、又は新聞記者等にして我國に漫遊せる者にて、往々我國商人の不道德にして信用す可らざるを云ひ、歐米の新聞雜誌等に於て盛に之を攻撃する者あり、歐米人果して人種的偏見を以て故に我が商人を攻撃するが、

我商人は果して彼等の云ぶが如く不徳義なるか、兎に角彼等をして此の如き攻撃の言を歐米の公衆に向て發せしむるに至りたるは多少我同胞商人の中に不徳を爲したる者あるが故なるべし、煙のある所に必ず火ありとは古來の諺にして、日本商人不徳義の噂ある下にも亦多少の不都合なかる可らず、然らざれば如何に我國に對して偏見多き外人と雖、豈徒に筆紙を弄して我商人を攻撃するものあらんや、我が商人にして誠直内外に向て愧つるごころ無ければ幸なり、然れども若し不然して此の如き悪感情を抱かしむるごせば之に依て我國運を増進すべき外國貿易の發達を阻害せらるゝご多かる可し、我國商人たる者顧慮せずして可ならんや、「アレン、フート」なる者嘗て書を米國工學雜誌に投じて曰く「日本人は摸倣の性に富むご雖も發明の力なし少しく伶俐なれごも道

徳の感念なし」と、神戸クロニクルの記者「ヤング」は英國十九世紀雜誌に於て日本の商業を論じ、日本人の商業道德は支那人の道德に劣り日本人は他の諸事業に於て信任す可きも商の事に於ては決して信すること不能るを云へり亦日本商業の未來を論ずるの言に「假令未來に於て日本の輸出入額は大に増加せんも若し日本人の商業道德にして發達せざれば外國貿易は依然として外國人の手中にあらん」と、余又或る時日本に漫遊せる一米國人に日本人の如何なる民なるかを問へるに、彼嗚呼之等の評言は果しては莞爾として「商人を除きては悉く尊敬す可き民なり」と答へたり無根の譏誣なるや將又眞實を穿てる適評なるや要は自白願にあり今歴史に就て見るに、希臘人は大なる想像力を有せしが故に文學哲學等美術於て進歩せるも彼等は好智に長け訴訟を好み誓約を

不顧りしが故に商業に於ては成功し不能り一なり之に反して羅馬人は規矩を尊び誓言を守り至つて正直なりしが故に戰爭に於けるが如く商業に於ても勝利を得たりき、亦近代の諸國に就て之を見るも佛國伊國等人心輕躁にして商を以て重要な業とせざりし國に於て商業は發達せず、英米等商を尊び之を以て眞正なる紳士の業となし信用を以て至重の資本とせる國に於て商業は繁榮せり、之に依て之を見るも商業を發達せしめ國利を増進せんせば先づ商を以て尊ぶ可き業と認め隨て之に従事する人々をして自ら徳を守り義を固くする氣風を習はしむるにあり、我國に於ては封建時代より重農輕商の惡風ありたるが故に商人にも亦白主自尊の氣性なく唯利と益とを以て目的となすに至り、人も亦商人の不徳義を行ひる時に當り「商人のこゝなれば左もありなん」との

言を以て商人を嘲笑し其の徳義と責任を問ふことを爲さざりしなり、故に尙今日に至るも商業を蔑視する者、商には道德なしとの誤想を有する商人との存するあるなり、豈慨嘆す可きにあらずや。

日本商人の一大欠點は目前の小利を見て遠大の利を不知、隨て信用を重んぜずして契約を輕んずること之なり、大凡何の業を不問小功に安すんずるときは怠惰を來し満足を生じ、達發を阻止するものなり、亦信用を重んぜず義務を怠るときは決して成效せざるなり、殊に商業に於ては信用を以て經こし、義務を以て緯こし、遠大の利を計るにあらざれば偽欺奸計行はれ其弊害實に恐る可きなり、西洋の諺に「正直は最良の政略」と云ふことあり、之れ商者の記臆す可き最良の金言なり、何んとなれば商業は此の諺の實行さるゝ

所に榮え實行されざる所に敗るればなり、

如何にして商業道德を發達せしむべきや、先づ「スペンサー」氏が云ふが如く一般の輿論を喚起し商業道德の感念を深からしむること、商者をして自己の職業の重要なるが故に徳と義とを重んぜざる可らざることを自覺せしむること、及諸種の商業學校等に於て大に商業道德を教授することに努むべきなり

三者共に簡易にして説明さるるの必要な可し、要は唯此の三者を實行するにあり

其れ我國は古來世界の靈洲東亞の道義國として知られ山は秀で水は清く四時美を以て輝き之に住する日本人亦此の靈を受て生れ此氣を保して死し、廉潔にして義と徳を重ずるを以て自ら慢るものなり、然るに商の一事に於て義務を忘れ信用を破り徳義に反

する行爲をなし、遂に歐米人の嘲罵を受くるに共に富國の基たる商業の自滅をなさしむるが如きことあらば、之れ己を欺き國を危くするものと云ふはざる可らず

## 第七章 労働組合

我が國の商工業は日月と共に進歩し、殆んど歐米諸國と肩を並ぶるが如き觀あるは、誠に喜ぶべきなり、而して是等商工業の進歩は我國労働社會に亦少なからざる變化を與へたるは疑ふ可からざる事實なり、以後經過する數年に及ばば、經濟的變化が終に我が労働者を驅て歐米に於ける労働者と同一の境遇に至らしむるは火を睹るより燎なり、是れ即ち我國労働社會の新時代なりとす

労働社會の發達に従て労働組合の必要を來すは自然の然らしむ

る所なり、故に余は先づ此に労働組合の必要を説き、聊か讀者の一考を煩さんとする、然れども或は云ん労働組合は是れ我國に適せず、唯だ一の直譯的空計のみと、雖然余の此の言を爲すは決して輕々に出でたるに非ず、即ち我國に於ける商工業の進歩の程度を知らずして、漫に歐米の制度を直譯して之を輸入せんと欲するものゝざるなり、然れども後進國たる日本は終に先進國たる歐米の模範に則らざる可からざる自然の趨勢を如何せん、加ふるに經濟的變動の一たび歐米に現出するあらば日本の寒村僻市に至る迄皆な其影響を被らざる可らざる今日なれば組合の良否は地の東西人情の異同に依て論ずるより、寧ろ之を經濟の實情に依て尋ねざる可らざるなり

然るに或る者は云はん我國の資本家と労働者の關係は歐米と異



なり、春風駘蕩の趣あり、故に財主と労働者の大衝突はなかるべし。隨て労働組合の必要なしと、然り現今の状態にては或は然らん、然れども彼等の春風駘蕩なるものは決して千古不變の者にあらざるなり、若し商工業の發達に従ひ労働社會に一變を生ずるに至らば、今日春風駘蕩の状は明日化して落花悲惨の景を呈出するも未だ計る可からざるなり、是れ蓋し經濟社會の潮流は川となり海となり地球を一貫して激奔し、殆ど靜止せざるが故なり。

人又云はん、労働組合は最良の勞工者を作らず、却て平均の労働者を生じ、天然に悖て賃銀の平均を作り、労働者が多額の賃銀を得んと欲し、最良の労働を爲さんとするの熱心を失はしむと、此の如き言は未だ組合を解せざる者の云ふべき事のみ、元來労働者の賃銀は過去に於ける經驗、労働の種類、資本の有無及び傭者の意に應じ

て定まるものにして、組合は之を無視し、強て賃銀の平均を作るが如きことを爲さざるなり、組合は單に洋傘一本を作る賃銀は五十錢と定むるが如きことあるべきも、一人の労働者が一日に何百本の傘を作るも、何十圓の賃銀を得るも決して關する所にあらず、唯だ、組合は賃銀の割合を定むるに止るのみ、故に労働者が最良の労働をなさんとする熱心を失はしむるが如きことあらざるなり。英の「ロージャス」氏曰く労働組合に反對するものは労働問題を學ぶるに依るなり、之を仔細に探究して後反對せし者あるを聽ずと眞に然り、若し具に労働問題を研究せば組合の必要を見出すも決して之に反對するの結果を生ずるが如きことなかるべし、然るに世人動もすれば労働組合の下にある或る労働者の行爲を以て直に労働組合の全軀を判斷せんとし、或は少數の組合が暴行を爲し

たりて直に労働組合其のものを以て危険なるものとなす者あり、然れども此の如きは未だ眞に組合の目的及組織を知らざるもの云はざる可らず、労働組合は労働者に暴行を勧め、經濟社會の平和を破らんとするものにあらざるなり、否な寧ろ平和を維持するの一機關なり、如何となれば組合は労働者の利益を保護し、彼らに教育を與へ、勉めて平和的労働者を作るものなり、見よ、一千八百八十六年白耳義國於て組合なき労働者の暴舉が多く、害毒を社會に流したるは同年米國に於て組合の下のある労働者が同盟罷工せる時の行爲の比較的平和なりしを、蓋し暗々裡中明に組織されたる労働者の平和的なるを證するに足らん、抑も労働組合は労働者の道德を高むるものなり、且つ組合員も組合の名義に對し自ら顧る處ありて不良の行爲を慎むべし、又組合

は毎月義捐若くは會費を以て教育の費途に宛て、働勞者及び其子弟を教育することを得るなり

組合は今日の經濟界に於ける資本の結合と同じく勞力の結果を完くし、富の配分を平均せしめ、單獨の労働者がなし能はざる大事業を引受け、多數の労働者に職を與ふるが故に、隨て一國の生産力を増加するものなり

組合は保險法又は他の方法により旅行する労働者をして安全ならしめ、且つ労働者の負傷及疾病又は極貧を救濟することを得べし

組合の下にある労働者は比較的愉快にして、餓死の憂なし、又組合は組合集會所を設置し、時々實業家若くは學者を招聘し、講義演説等を聽くことを得るが故に、社會の事に通達し、自然の間に労働者

の智識を増加することを得べし、又普通労働者が酒店に飲食し酔後賭博に一日の得たる賃銀を失ふが如きは組合の方法によりて矯正することを得べし

組合の下にある労働者は比較的社會に對する罪惡を犯す者少し、米國に於ける多數の労働組合が如何に同國労働者中の罪人を減ぜしめたるは過去十年間に於ける統計を見ても知ることを得べし

組合は社會的の制度にして社會的労働者の爲めに缺く可からざるものなり、故に今日識者の云々する婦女及小兒の情態の如きも組合によりて矯正改良することを得るなり

組合は多數の労働者を一堂に集め相互談笑の間に親密の關係を作るの機あり且つ財主と労働者との關係も亦親密を加ふるに至

らん、二者の間密着圓滑なれば隨て同盟罷工等の憂なし故に之に依て工業界の恐慌にして救るゝものあるべし

以上述る所に依て考ふるに労働組合は労働者に必要なるのみならず、經濟界の平和を維持するに於ても亦缺く可からざるものなり、英國の經濟學者「アルフレッド・マーシャル」氏曰く、今日の労働社會の進歩と労働組合は共に密接の關係を有し相離るゝこと能はざるものなりと、眞に故なきに非ざるなり、若し労働社會にして組合なくんば、其進歩を見ざるのみならず或は境遇を一變し身を完く奴隸の域に陷没するも計る可らざるなり、今や奴隸制度は廢止せられ世人皆天理を樂んで敢て不公平の事なきが如しと雖も、若し眼を一轉し仔細に觀察し來れば、奴隸の惡弊は依然として其痕を存するが如し、遠く之を亞弗利加に求めざるもロンドン市街ニユ

一ヨーク市中及我東京市街にもあるに非らずや、蓋し富の分配其の當を得ざるが故に、富者は益々富を致し、金殿玉樓に夢を結び、貧者は益々貧を來し、敝衣粗食を以て牛馬の苦辛を嘗む、貧富の懸隔は今や貧者を驅て奴隸の境遇に投ぜんとしつゝあるは豈悲むべきの至りならずや、嗚呼是れ自然の結果なる乎、抑又背理の結果なる乎、余輩は相信す、背理的競争の結果なりと、是れ即ち社會的組織少なきに原因したるなり、換言すれば労働者が一致結合の力を欠きたるが故に斯く經濟上不公平を生したるなり、嘗てアダム、スミスが労働者の無勢力より經濟上の不公平を生したるを慨歎したるは實に偶然にあらざるなり、且つ經濟上に於てのみならず、政治上に於ても同一にして、富者は起て政治に參し之を左右するも貧者は常に其の下にありて彼等が制定せる法律に其生命財産を托

せざる可からざる状態は眞に憐むべきにあらずや、元來一國は國民全體の所有にして、一國の政治は一國民全體の政治なり、決して僅かの富者豪族の處斷左右すべきものに非るなり、然るに貧富の懸隔は遂に人權に小大の差違を生じ、數万の貧民即ち一國の多數人民をして僅少の富者に依て支配さるゝに至らしめ、彼等の口彼等の舌をしては彼等の權利を主張するの具たるよりは、寧ろ煩悶苦を叫ぶの用を爲さしむるに至るべし、此の如きは蓋し労働者が一致結合の力を缺くに依て生ずべき弊なり、經濟上政治上に於て此の如し、若し前途一步を誤らんか彼等労働者は純粹の奴隸に變化するやも知る可ら、故に労働社會が今日發達を圖り尙ほ未來の黄金時代を期せんご欲せば組合一致に依りて進行するより他に良策あらざる、彼等の所謂黄金時代とは一日幾千の賃銀を得る

の日にあらず、又駟馬に鞭ち輕裘を纏て工場に通勤するの日にあらず、完全なる權利と自然の幸福を享受するの時にあるなり。百千の職工條例あるも、億萬の工場條例あるも、若し確乎たる労働者組合なくんば、労働者の地位を高め、權利を完ふし、生活の程度を高め、彼等の子弟に完全の教育を施し、以て完美なる未來の労働者を作ること能はざるなり。

今や我國の商工業の發達は茲に労働社會の一新を來すべく、労働社會の進歩は組合の必要を感じるに至らん。若し労働社會にして組合なからんか、其發達を見ること能はざるのみならず、労働者の安寧と經濟社會の平和を保持すること能はざるべし。組合は實に労働者の安寧を護る砲臺なり、平和を維持する軍艦なり、之に一身を托して進行するに非ざれば、彼等は永久奴隸的の位置に屈して

其の膝を伸る能はざるに至るも計る可からず、故に我國労働者も商工業の發達と共に其思想を一變し、舊弊を洗滌し、進て歐米の労働者と比しく肩を並る覺悟を以て熾に組合の方法を應用すべきなり。

## 第八章 遺産相續税

元來何れの税法たるを問はず、課税上の公平を有せざるものは良税と云ふべからざるなり、課税の公平とは何ぞ、之れ吾人が第一に認定し置かざるべからざるなり、抑も税の公平とは納税者の所有、又は収入の分に應じて、其の比例に依りて税を拂はしむるの義にあらず、税の公平とは各納税者が其の能力に應じて税を拂ひ各人其の苦痛を均しふするを云ふものなり、例令は一年間に百圓の收

入ある者が其一割即ち十圓を税として納め、一萬圓の收入ある者が其一割即ち千圓を拂ふとせよ、之れ決して税の公平にはあらざるなり、何となれば百圓を得る人が十圓を拂ふと、一萬圓を得る人が千圓を拂ふとは其の苦痛決して同じからざるなり。又財産税に關して曰はん、十圓の財産を有する人が一割即ち一圓を拂ふは、千圓の財産を有する人が百圓を拂ふよりも其苦痛とする處大なるが如し、是れ即ち其の負擔均一ならざるを證するものにあらずや、故に税の公平とは負擔の均一にして、負擔の均一とは納税苦の痛が各人に同じ同様なるの謂なり、此の如く予はまづ税の公平なるものを明かにして而して後遺產税について逐次項を分ちて謂ふ所あるべし。

一、抑も遺產税に類するものは羅馬に於てオーガスタス帝王時代

にありたる *Vicesima hereditarium* なるものに始りたり、而して此税は遺產の二十分の一を課し之を以て老功兵の年金を支拂へり、又英國に於ては *Relief* 又は *Heriot* なる税法遠く封建時代に行はれ獨逸に於ては *Stempel* なる遺產法行はれたり是等は今日の遺產税法に似たる處ろ多かりしと雖も、其實に於て異なる處ありたり、遺產税が財政上有用の税となりたるは近世の事にして、其始は瑞西にして其後、英、米、國の諸國に傳播せり、米國に於ては紐育、ペンシルヴァニア其の他十三州にのみ實行され州税上重要な税目たり、又英國の *ベンザム* は已に前世紀に於て遺言に依らざる遺產に税を課するの至當なるを説けり、其言ふ所經濟的にあらずして寧ろ哲學的なれども又見るべきもの多し、或は一の苦痛なしに收入を得るの税は遺產税に若くものなしといへり、氏の言に依れば失望

こは囑望あるか故なり、若し相續法によりて財産を譲ることを認めざれば、遺産に囑望するものもなかるべし、隨て失望するものもなかる可し、勿論相續の自然の權利、即ち父母の財産を子孫が必ず相續する權利といふが如きものはあらざるなり、乍去ベンザムの云ふ處は哲理上の議論にして經濟上又は社會學上の考察に缺くる所なきを得ざるなり、

二、遺産税を課するに當り政府は此の如き方法によりて貧富を區別し富人のみに此の種の税を課し以て富の移轉(遺産相續)を妨ぐるの權利なしといふものあれども、是等の人は單に事實のみを見て理の存する所を知らざるなり、抑も政治上の權利とは自然に人類が有するの權利にあらずして、悉く便宜上の權利なり、切言せば政府が人民に税を課するは絶體的の權利にあらずして唯一時の

便宜上必要なが故のみ、されば遺産税は税を拂ふの能力ある者のみが納税するを以て課税公平上更に不都合なかるべし。

三、遺産税は直税なるか將た間税なるかに就ては經濟學上一個の問題なり、若し該税にして米國南部諸州に於けるが如く登記税とすれば是れ明かに間税なり、又瑞西に於けるが如く死人に課する税又は遺産受取人に課する税とせば直税なり、然れども遺産税が直税か將た間税かの問題は名義上の議論に屬するを以て茲に贅説するの必要なし、又遺産税は社會主義の變形にして富を平均し、財産を沒收するの傾ありとて之に反對するものあり、されど個有財産の平均は經濟上政治上、大に希望すべき事にして、中等社會の減少により人民が貧富の極端に走るは悲しむべきの現象なり、又縦へこれが社會主義の變形なるにせよ、道理上善良なるものは採る

へし、何ぞ其名義の如何によりて取捨するを須るんや。

經濟學の泰斗アダムスミスは遺産税は資本に課するの税なりとの所以を以て之に反對せり、然れども資本に課するの税必ずしも悪税なるにあらず、地租、若くは鑛山税の如きは如何、資本に課するの税、雖も資本の増殖を甚しく害せざる以上は課税するも差支なし、特に遺産税の如きは資本の發達を妨げ生産を害する等の恐れ極めて少し、且つ此種の税は不意の得分に課する税なるを以て他に影響する事なし、又何れの税を問はず一旦課税する上以は納税者より多少の生産力を削減するは免かるべからざる事にして、唯遺産税の場合のみにあらざるなり。

四、次に遺産税は重税なりとて之に反對するものあり即ち同一の財産にて二度の税を拂ふは不當なりといふ、然れども此の如きは數十年に唯一回拂ふのみなれば決して重税といふべからざるなり、唯課税の際に當て考察を要すべきは納者が拂ふべき能力を有するや否やの點にあるのみ、然れども小財産の相續は別事として概略遺産を受繼ぐべき程のものは皆な其の能力十分なりといふべきなり。故に此の税は、財産税の行はるゝ國に於ても又收入税の行はるゝ國に於ても補加税として課税すべき最良の税なり。

五、遺産税は大なる収入を政府に與へ、貧富の平均を保し税法の公平を示し、社會制度の發達を來すの點に於て著るしき功あり、唯此税を課するに方り尤も注意すべきは課税上如何なる結果を社會に及ぼすべきやの點なり、今若し五百圓の財産を有する人が、此の五百圓に依つて辛じて家族三人を養ひつゝありとするか、若し不幸にして此人死亡し其子が相續するに際してこれが課税を求め



んか、其の不當や大なり、何ごなれば五百圓の資産に依つて僅かに生活したる三人の家族は相續税の爲めに其幾部分を取去らるれば、到底生活し能はざるなり、隨て社會組織上尤も緊要なる族制は破らるゝに至らん、故に遺產税を課するに當り、生活に必要なる資産の度合を標準し、それより尠き財産の相續には更に課税せず、此の定度以上の財産には累進法によつて課税すべきなり、例へば五百圓以下の財産は凡て免税とし、又一萬圓の財産には其一分即ち百圓を課し、百萬圓の財産には其二分即ち二萬圓、千萬圓の財産には其三分即ち三十萬圓を課すといふが如し、此の法は現に英國の遺產法によりて行はれつゝある處なり、英法によれば相續すべき財産にして其價五百弗以下のものなれば凡て無税にして五百弗以上二千五百弗迄の財産には一分税(百分の一)を課し、五萬弗以上

十二萬五千弗以下の財産には四分税(百分の四)を課し、五百萬弗以上のものには八分税(百分の八)を課すといふが如し、此の如きは税の負擔より生ずる苦痛を平均するに最も適したる手段なり。

六、抑も社會學上遺產制度は子孫の安寧幸福を保し事業の繼續を計り、親子兄弟の團樂を得るに最も必要なる制度なり、殊に吾人が此の社會に於て勞力苦辛する所以のものは獨り自己の愉快幸福に資せんとする故のみならず、遠く子孫の爲めにあるは疑なき事實なり、故に若し吾人の財産にして相續さるゝ事能はずとせば、恐らくは熱心に生産事業に盡力する人なきに至らん、或は生前に於て資産を蕩盡し畢るに至らん、故に資産の相續は必ず實行維持されざるべからざる好制度なり、然りと雖も若し此遺產の權利をして無限に大ならしめ、自由に繼續せしむるや、其弊も又實に大なり、

今若し數百萬圓の財産を有する人が死去したるに當り一の税法にも依らずして之を子孫産繼續せしめんか、數百年來父母祖先が貯蓄し來れる資<sup>を</sup>は徒らに彼等が遊蕩の料となり、奢侈濫費の結果、其人の奮發心を消磨し、敢爲活潑の元氣を損ずるに至るのみならず人間の處世に必要な獨立の精神を廢滅するに至らん、故に政府は遺産税法を制定して此の種の弊害を妨遏し萬人をして均しく富を作すの機會を得せしむるに努むべきなり。

七、現時我國に於ては年々歳出の高まらんごすると同時に又歳入も之に伴ふて進まざるべからず、是を以て或は地租増徴或は砂糖税或は酒税の如きを賦課せり然れども此の如きは皆是れ財政上一廉の問題にして學者の間に大なる議論もあることなるが、吾人の見る處を以てすれば遺産相續税の如きは就中最良の税にして、

以上諸種の税に先んじて實行すべきものなり、世人は往々遺産税の如きは少額にして採用するに足らずといふ然れども外國の例によりて之れを見るに決して然らざるなり、英國に於て此の税より年々得る處ろは實に五千三百餘萬弗に上り、伊太利にては七百五十萬弗に上り、米國にては洲税として四百萬弗に上れり、斯く論じ來れば遺産税は政治上、社會學上將た經濟上最良の税なり、一は以て富の不平均を妨遏し一は以て萬民をして同等自營の機會を得せしめ、一は以て富者子孫の怠惰を尠ふし、一は以て國家の歳入を増し一は以て貧人の負擔を輕からしむ、是れをとも良税源といはずして將た何をか良税と言はん。

## 第九章 國家は勞働問題に就て干涉するの

## 權利ありや

勞働問題の聲稍々喧しく、隨て個人主義及び社會主義てふ問題も亦熾に喧傳さるゝに至りぬ、而して勞働問題に就て目下緊急論題として考究されつゝあるは、國家は法律を制定して勞働及資本の紛擾に干涉する權利ありや否やといへるの大問題なりとす、此に於てか余はまづ國家に權利ありといふ者、又無しといふものに就て各自の主張する所を摘出し、兩論者の長短を比較考量して後卑見の在る處を陳るゝことあるべし。

否干涉論者の主張する要點に曰く (一)自由競争は自然の状態にして且つ文明社會の賜なり、進歩せる社會には自由競争なかるべ

からず自由競争は人類進歩の母なり、文明の基なり、若し是を抑ゆれば、國家の隆盛は忽にして廢滅に歸せんのみ (二)國家は個人の集合なり故に若し國家の力を以て個人の事業に干涉する事あらんか恰も個人が個人を抑壓すること同じく全く自殺的の愚案なり (三)國家の干涉は生存競争を妨げ進化の大法たる適者生存に反し不適者の生存を奨勵するに至らん (四)國家の干涉は個人の獨立を危からしむるの恐あり、若し個人の獨立にして危からんか何に依つてか吾人は安んじて生活するを得ん生命財産の安全を樂むを得ん (五)從來の政治史、經濟史は明かに國家の干涉の有害なるを證明せり、英、米、佛、國の革命並に、伊太利の獨立戰爭は皆國家干涉の結果として現出せしものなり (六)國家が諸種の經濟事業に干涉することとなれば其干涉を執行するものは政府の官吏なり彼

らは決して個人の如く活潑機敏ならず又經濟的に事を支配するの能なく、且つ事業上の損益に關して直接の關係を有せざるが故に萬事に就て不注意なり、故に是等の人を以て事業を支配せしめば商工業の發達を沮害する事實に大なるべし (七) 國家に過大の權利を與ふるは多數の人民に過大の權利を與ふるに同じ若し此の如くなれば少數者は常に多數者の抑壓の下にのみ生活せん、蓋し多數の壓制は個人の自然の權利(ナテユラル、ライト)を撲殺すべし云々

以上七項を言へる處ろは即ち否干涉論者が主唱する要點なり、是に對する干涉論者の所説あり

(二) 極端なる個人主義者は往々個人には國家を離れて別に權利ありとの説を爲すも元來個人の權利とは或る個人が他の個人に

對する權利にして曰は、比較的のものなり、且つや自然の權利と云が如きは前世紀の謬説にして今日は既に陳腐に屬せり、完全なる個人の權利は個人が社會にある間のみ存するものなり、一步を譲りて個人は社會を離れて權利を有することするも是は極めて微渺なるものにして論ずるに足らざるなり、抑も人類は社會的動物なり、故に社會を離れて個人の權利義務を説くの必要なし、社會の進歩すること共に個人の權利伸張し國家隆盛に赴くと共に個人の活動地域は廣まるものご知るべし。

(二) 吾人は元より自由競争を是認す、然れども極端なる自由競争には反對せざる能はず蓋し今日の所謂自由競争は得る處の利益よりも寧ろ失ふ所の損害の大なるを知るべく彼のマンケエスタ一派の自由競争説は最早陳腐に屬せり、如何に自由説が宜しけれ

ばこて吾人は飢渴に苦しむの自由を欲せず、如何に競争説が宜しければこて吾人は寒暑に悲しむの競争をば要せざるなり。

(三) 今貧富の二者に就て之を見んに、富者は數千年の昔へより積蓄する所あり、故に相當の教育を受くる事を得たり、是を以て彼等は才能、學藝、資産のすべてに於て甚だ優る處あり、之に反して貧者は依然たる貧者なり、競争に用ゆべき武器一もあるなし、此の如きものを相對峙せしめて自由競争せよといふは無理も亦甚だしからずや、貧者(勞働者)と富者(資本家)との出發點の相差ふ事數千歩なり、之れらをして等しく今日の活競争場裡に走らしめんことす、貧者の勝つべからざるや自然の數なりといふべし。

(四) 國家の干渉は生存競争を妨げ社會を退化せしむといふものあれども之れ誠に淺薄の議論なり、抑も生存競争は單に衣食に向

つての競争にあらず、智識に向ての競争も又生存競争なり、國家の經濟的干渉は衣食に向つての競争を減じて智識才能の競争を獎勵するものなり。

(五) 個人の獨立は全ふせざる可らざるも女子、少年者の如きは政治上、經濟上、生理學上より獨立完全なるものとは云ふ可からず、故に國家が干渉して彼等の權利と衛生とを保護するは當然の事あり、若し女子及少年者をして男子と同じく此の吸血的競争場裡に自由競争せしめんか其の結果は實に慘憺たるものならん、故に國家は將來の國家を完美ならしめんが爲めに干渉するの權利を有するものなり。

(六) 過去に於ける國家の經濟的干渉は甚だしき弊害を生ぜしも其時代に於ける國民の經濟的思想は又甚だ幼稚たるを免がれず

且つや學者すら往々にして經濟の原理を誤解するに至りし程なれば此の時代に於ける國家の干渉が失敗せしは又怪むに足らざるなり、然るに是を以て直ちに今日に適用せんと欲す、妄も又甚し、近世の英國工場法の如き、獨逸殖民法の如き、共通組合法の如き、又米國に於ける各洲の工場取締法、家屋建築法、貧民救助法の如き、如何に有益にして一般人民の安寧を保護せしかを知らば干渉の必ずしも有害ならざるを知るに足るべし。

(七) 政府官吏の無能云々の如きは小事のみ、官吏の才能多き者を欲せば官吏登用法の如きを改正し公平なる試験官を選び、月給を増し才學あるもの、みを任用すべきのみ、一步を譲りて政府官吏は經濟的に諸事を監督するに拙なりとするも、一利一害は事物の常なり、得る處多くして失ふ所少ければ又採用すべきなり。

兩者の主張する所此の如し、今双方を比較して考ふるに各其言ふ所に理あるが如し、故にいつれを是としいつれを非とせんは至難の問題なるが如きも、必ずしも然るにあらず、まづ偏頗の心を去つて之を見るに元來この干渉問題は社會主義者と個人主義者との論争にして干渉論者は社會的なり、非干渉論者は個人的なり、されど余は兩者いつれの方にも是非の觀念を特たず、唯一意眞理のある所を採らんと欲するのみ。

物偏すれば必ず害あり、社會主義も個人主義も極端なれば共に危険なり、世の平和を喜び、秩序を尊ぶもの、斷じて取らざる所なり、予は個人主義者と同じく個人の權利を重んじ獨立を尊ぶ然れども又國家に權利ある事を信じ、且つ國家は必ず或る程度まで經濟的干渉を爲すべきものと信ず、自由競争は必要なり、自己心は

又要用なり、然れども亦是と相並んで愛他主義なくんば今日の社會は決して進歩發達せざるなり、熱あり又水あり、而して宇宙間の玄妙作用は生ず、<sup>之は</sup>同じく社會主義と個人主義とありて始めて人間社會の化育發達を期すべきなり。

個人主義者のいふ所に採るべきもの甚だ多し、然れども予は社會主義者と同じく國家が經濟的干涉をなす權利を有するを確信す、只社會主義者の如く國家の全權全能を信ぜざるなり、個人主義者の主張するが如き個人の自然的權利の如きは實に「ルーソー派」の腐説にして個人の自由及權利の如きは社會を離れて外にあるべきの理なし、彼の「ヘーゲル」の説の如く、人類には完全なる自由といふものなく、自由は個人が社會全体として有するのみ、而して國家の權利は單に便益如何に依つて決定さるべきもの、み、若し干涉

にして社會多數を益し、人民一般の安寧を保護し得ることすれば國家は正さに干涉の權利を有するなり、必要は權利を生ずことは動かすべからざる哲理にして、予は經濟社會の情況が國家の經濟的干涉を要求するを認識するものなり、貧富の懸隔いよく甚だしく大資本は小資本を壓倒し、資本家は労働者を壓制する傾向ある今日に於て誰れか經濟法の不必要を説くものあらんや、又誰れか干涉の不必要を唱ふるものあらんや、經濟社會の病弊や勿論國家の干涉のみにより、一二の工場法貧民救助法にのみ依つて治すべきに非ず、實に根本的治療を要すべきものことす、然れども國家の干涉は病勢をして益々熾ならしむる事を防遏する一手段なり、恰も脚氣患者に胃病の薬を服せしむること同一、吾人は經濟病の根本的治療をなすと共に干涉法てふ一種の健胃劑を要するなり。

此の如く予は國家に干涉の權利ありと認むと雖之れには程度あり、無程度の干涉は實に極端なる社會主義にして吾人取らざる處なり吾輩は國家が凡ての經濟事業に干涉するの必要を認めず、唯其の必要ある場合にのみ干涉の權利ありといふのみ、而して如何なる場合が果して干涉の必要あるかといふにこれは公平なる輿論の指示する處に依るべきのみと答ふべきなり。

### 第十章 産業界に於ける傾向

熟ら産業界の情態を觀るに勢力ある工場又は會社は能く時世に適し日月の経過と共に益々繁榮するも勢力なきものは全然衰廢するもの、如し、而して勢力ある工場又は會社は即ち經濟的勢力及經濟的活力を有する工場及會社に外ならざるなり、今や開進國

に於ける事業家は此の經濟的勢力と活力を得て時世に適し以て繁榮を致さんが爲に或は勞力を合併し或は資本を連結して事業の結合に努むるもの、如し、愈大にして愈勢力を増加す可し、然らずんば必ず滅亡せんとは進化が産業界に聳響する豫言にして亦結合てふ産業界の傾向を造出する所なり

北米合衆國及獨逸帝國は方今世界の二大商工業國にして此の二國に於ける産業的傾向は以て世界の産業的傾向となすに足る可きなり換言して云へば他の商工業國も愈々益々發達せば遂には大體に於て此の二國に於けると同一の産業情態を生ずるに足らん、合衆國に於ける商工業の結合は南北戦争(一八六二年)以後のことにして近年に至り特に顯著なりとす、今千八百九十年の「モンサスに依れば





六となり生産額は一八八〇年には僅に二十九萬五千八十二弗なりしも一八九〇年には六十六萬八千四百四十弗となり之れ明に米國製鐵會社は年々盛大となり其生産は少數會社に聚合されつゝあるを證する非ずして何ぞや、獨逸に於ける商工業は米國に次て發達せるものにして其情態も稍米國に於けるものと類す、一八七二年には獨逸に千四百の讓造會社ありしも一八八五年には千五十に減じたり然れども其使役する職工及生産額に於いて著しき増加をなせり、亦同國「バーンスタイン」氏の調に依れば獨逸工場

職工ノ數

工場	一八八二年	一八九五年	増加ノ割
小工場 (一人ヨリ五人迄ノ職工ヲ使 用スルモノ)	二、四五七、九五〇	三、〇五六、三二八	二四、三

中工場 (六人ヨリ十人迄ノ職工ヲ使 用スルモノ)	五〇〇、〇七九	八三三、四〇九	六六、六
大工場 (十人ヨリ五十人迄ノ職工ヲ 使用スルモノ)	八九一、六二三	一、六二〇、八四八	八一、八

即ち一八八二年より一八九五年迄の十二ヶ年間に於て小工場に使用さるゝ職工の増加せる割合は二割四分餘なるも大工場に使用さるゝ職工の増加せる割合は八割一分餘にして之れ亦獨逸に於ける工場が逐年強大となり其の工業の聚合を證明するものなり  
人文の發達社會の進化が適者生存の法を顯著ならしむるに共に産業聚合の側向をして益大ならしむるは亦疑ふ可らざるなり、近來歐米に於て「トラスト」の組織行はれ、日々其多を致すは生産聚合の結果に外ならざるなり、「ガントン」氏曰く「トラスト」の歴史は進歩

的社會に於ける資本結合の歴史なり」と然り生産業の結聚は經濟的傾向にしてトラストの如きも其餘果なれば決して妨遏す可らざるなり

我國の商工業は未だ歐米殊に合衆國及獨逸の商工業に及ばざること遠きも今や漸く諸事業勃興の時代にあれば小會社小工場の増加するもの多く生産の區分さるゝものありと雖月を重ね年を経て産業的大發達を來たすと共に勞力及資本を結合するの必要を見るに至らん樵夫の大木を倒さんとするや先づ其木に向を見て而して後に鋸斧を用ゆ故に倒すこと能はずと云ふことなし、世の産業家なるものも能く事業を經營し其果を收めんこそせば先づ産業界の傾向が生産聚結なることを忘る可らざるあり

## 第十一章 慈善事業

慈善とは物質的に貧民を救助することを意味するものにして、即ち自ら生活し又は自から一身を療養し能はざる者を扶助する事に於て自己の餘れる物を以て他の不運不幸の者を救ふ事なり、慈善事業とは是等の目的を達せんが爲めに舍院を設立し又は公私の慈善を管督するを云ふ、而して慈善事業に公共的個人的の二種あり、公共慈善とは政府事業にして中央政府若しくは市町村が特に公共資本を以て慈善院を設立し又は院外扶助をなすを云ふものにして、私人慈善事業とは個人又は團體にして政府に關係なく貧民救助の爲めに行ふ事業を稱するものにして、二者の目的に就ては少しく相異なる所あれども大體に、至りては全く同一たらざる可らざる者なり、

然して此の事業の原質たる慈善的心意は人類の有する最も高尚なる精神にして、蓋し他の動物と區別せらるゝ所以のものなり、極言すれば慈善の一事は人類の天性的義務にして、何處の人何處の地如何なる時代に於ても爲さざる可からざるなり、天性的義務を忘れ人類の特有なる精神を失ひ、徒に強者生存を唱へて競争を貴ぶが如きは是れ人間として完全なる人間に非ざるなり、動物として高等の動物にあらざるなり、之れ等の人々の尊ふ利己主義は即ち仇敵主義にして、是等の思想のみを以て社會の一般を蔽へば、終に人類社會を變じて蠢爾たる下等動物の社會たらしめんのみ、或る場合に於て競争は勿論必要にして利益あるものなり然れども之に因て生ずる狡猾殘忍罪惡等の弊害も亦實に大なるものなり、故に社會上より及び人性の特質上より見るも生存競争のみは

決して吾人の採らざる處なり、然れども今や競争の弊甚しく、貧は益々貧に、富は益々富を致し、強は愈々強に赴き、弱は愈々弱に陥る、状態なれば隨て生ずる弊害に至りても實に夥しく、若し如斯にして一方に強は弱を憐み、富は貧を恤むが如き慈善心の發揚なかりせば、國家經濟の基礎を危し社會制度の秩序を亂し、強者富者の傲慢奢侈を社會の表面に現出すると同時に、其の裡面に貧人弱者の悲鳴哀叫を聽くに至らん、故に個人に政府に慈善事業を務むるは決して無益の事にあらずして、一は人性の特質と、一は社會の秩序を保たんが爲めなり、

慈善事業の人類に必要なる如此く、社會に必要なる復た此の如し、而して此の事業たるや己に紀元以前ユダヤ王國及びシリヤ等に於て行れたり、希臘の經史に見るもポーションクミフイレモンの慈善

に關する話あり、其他文學の中には必ず乞食の事態に就き記載するあり、已に乞食ありたりとせば、之に衣服を慈施したる者ありたること明瞭なり、之に依て觀れば慈善事業の因て來るや遠し、降て羅馬帝國時代に至りては國家經濟の整理を計り、及び人口の増殖を望みしが故に特に貧窮せる婦女及び小兒 (Puellae Faustinae) を救助せり、殊に東西を一貫して宗教の漸進は慈善事業を發達せしめたり、就中歐洲に於ける宗教的慈善の社會に與へたる利害に至りては是をレツケ一の歐洲道德史、アッシレー氏の英國經濟史、ウルホーンの耶蘇教會の慈善、クルツカー氏の米國社會問題等に見ば一讀昭々たるを得ん、且つ歐洲各國に讀て嘗て各政府が乞食及び流浪者の多分を撲滅せんを欲せしも到底能ざりしが故に、其の方法を一變し公共の費用を以て慈善的に彼等を感化救濟するの策

を講したるは疑もなく與て慈善事業の發達を促せし一原因にして、即ち英國に於ては改革時代、佛國に於ては革命時代、獨逸に於てはルーテルの改宗時代、米國に於ては獨立戰爭以後是れなり、歐米に於ける慈善事業は頓に發達せり、而して此の發達と共に多くの失敗を招きたるは又歴史上掩ふ可らざる事實なり、殊に宗教的及義俠的慈善の如きは大に害毒を社會に流したり、然れども是れ慈善其の物の悪きに非ずして、其の方法宜しきを得ざりしが故なり、否寧ろ彼等は其の目的を誤りしものならん、彼等が行ひし慈善は一方に自己を楽しましむるか、或は一方に自己を利せんが爲めになしたるに非ざれば、婦女小人の如く貧者及不幸者の境遇を自己に顧みて彼等を憐愛したるに過ぎず、故に其の結果貧者をして貧に甘じ、不幸者をして其の不幸を以て生活するの具となさしむ

るに至れり、畢竟するに彼等は慈善の本體を了せずして妄に貧人に向て金錢物品を惠與したるに過ぎざるなり、此の如き慈善は似て非なるものにして、貧人自身及び國家に取りては寸益なきものなり、徒に彼等貧人をして怠慢の念慮を増さしめ、終生彼等は貧苦の間を脱する能はざるのみならず、彼等の増殖は國家の上に取りて非常に憂慮すべきものなり、宗教信者が彌陀の淨土を望んで乞食に金錢を與へ又は天國に行くを目的として不幸者を憐むは却て慈善と唱ふる名義の下に國家の一面に寄生的動物を養成するに過ぎず、如此弊害は宗教的慈善のみに止らず公共的慈善にも存せり、然れども比較的私人的の事業は憐愍の情に流れ易く終に其の結果をして無効ならしむるのみならず弊害を生ずるもの多し、然れども是れ慈善其の物の悪きあらず、故に其の目的を完美なる

國家を造營するに國民の多數をして福利を樂ましめ安寧を得せしむるに置き、而して其の方法の宜しきを得ば或る一派の言ふが如く慈善事業は貧民の數を増加し下層人民をして獨立の精神を失はしむるが如きとは決してある可らざるなり、蓋し歴史上失敗を來したるは其の目的を誤りたるに其の方法の宜しきを得ざりしが故ならん。

近來歐米諸國に於て慈善事業の行るゝは實に著しく、最近の調査によれば佛國に於ては千八百九十二年中慈善に費したる政府の基本は三千八百二十四萬三千九百九十「フラン」にして、之に依て救濟せられたる貧者は一百七十二萬三千九百六十四人にして、同政府が單に慈惠病院のみに年々消費する處は一百五十萬「フラン」を下らざるなり、獨逸に於て一千八百八十五年中に扶助せられたる

貧者は一百五十九萬二千三百八十六人にして、此の費用も亦少小にあらざるなり、其他伊太利の如きは近年僅に慈善事業の發達せしに拘ず、一千八百九十一年中に公私慈善に消費したる金額は實に六千二百三十二萬六千三百十三「リレ」なり、オーストリア及ハンガリアにては一千八百九十三年中各種慈善院の數は一萬一千九百四十九にして、同年中救濟したる人數は二十五萬一千一百四十五人にして、院外に於て配布したる金錢財物の價額は五百五十五萬五百六十「フロリン」に及べり、尙ほ官設貧民救助院(Poor-Houses)のみに消費せし分は三百二十九萬一千四百四十「フロリン」あり、白耳義に於ては一千八百九十五年中慈善の爲めに消費したるは實に百二十四萬八千八百八十六「フラン」なり、其他米國の如きは元來慈善事業の最も發達せる國にして、内國に於て公設せられたる慈善

院(Alms-house)にて養るゝものは七萬四千人(千八百九十年統計)、孤兒院の設立に費したる所は四千萬弗餘、且つ毎年の消費は九百五十萬弗を下すと云ふ、ベンシルベニア、紐育、ミンガン、オハイオ、ウヰコンシン、カリホルニアの六州に於て毎年公共的院外慈善に費す處は二百五十萬弗、ブルークリン市の慈善病院は毎年二十五萬弗餘、紐育州に於ける私人的慈善は一百八十萬弗を費すと云ふ、以上此の如き發達を致したるは、一は政治上の必要及び經濟上の必要より來りたりとは雖も、一は先に中世紀に於て失敗を招きたる慈善事業と異なり、其の目的と其の方法宜しきを得たるが故に、其の結果の良好を收め隨て發達を來せし所以ならん、之に依て見れば慈善事業の弊害をして多からしむるは其の自的と其の方法如何に存するものにして、決して是を以て一概に慈善其の物が社

會に害あると言ふ可からざるは勿論にして、寧ろ社會の安寧國民の福利を計らば、進で慈善事業に向て盡さざる可らざるなり、況んや今日の如き競争甚き時代に於てをや、

夫れ競争激烈なる時代に當り、若し一方に慈善事業の如きものなく、徒に強者生存の主義のみを以て立んか、不幸なる貧民、不運なる不具及大者は到底天然の生命を完ふする能ざるに至らん、故に政府及び富者にして其の収入の幾分を割き、之を以て彼等不幸不運の貧民を扶助救済するは國家一般の上より觀察するに政府に於て爲さざる可らざる事なり、又人類の天性に考ふるも富者として盡すべき至當の義務なり、於此乎余は先づ國家及び富者と慈善事業との關係に就て少しく言ん、

多數の貧人をして強壯有益たる者となすの方法を講せざれば國

家の富強は望む可ならず、見よ一朝事有るの日に際し彼等を徵集し國家を防衛せしむるに能はざるに非ずや、又國費を得んが爲めに彼等に課税するとも難る可し、故に苟も一國の富強を圖らば須らく多數無爲の貧人病者を變じて強壯有益の者たらしめざる可らず、是れ國家として務むべきの事なり、且つ政府の目的とする所は多數人民の安寧福利にありとせば、其政費の一分を割き之を以て多數の貧者を濟ふは敢て職務以外の責任には非る可し、換言すれば一國の政府は實に人民の餓死、貧人多數の病死等に對し保險の義務ありと云ふも決して過言に非るなり、其他德義の上より見るも彼等多數の貧人を救済するは自然一國德義の頽廢を防遏する手段の一にして、又慈善的學校を起して貧人の子弟を教育するは國家將來に有用なる人材を生出する原素なり、慈惠病院、癲狂院



孤兒院、養育院等皆な之れに依りて得たる利益は、各自の貧人不幸者よりも寧ろ國家全體の上に於て存するなり、故に慈善的事業は國家として務めざる可からざる事にして、即ち國家完備の一方策と謂ふべきなり、

已に國家に利益あり個人に於ても利益あり、故に個人として亦慈善事業に向て盡さざる可らざるなり、且つ慈善の心意は人類の特有にして、他の動物と異なる所以なれば、苟も自己に餘裕ありせば其の一部を以て之を他の貧人不幸者に慈施するは人性として至當の事なり、英國の「ファウル」氏嘗て云へり、隣人の餓死するを聽て吾は卓上の美食を以て美食とし、自己の富貴を以て富貴となし、獨り之を樂むこと能ざるなりと、眞に爾り、如此思想は實に人類に缺く可らざるものにして、即ち完全なる國家、善美なる社會を組織

するの一要素なり、若し富者にして貧者を憐むことなく、強者にして弱者を扶くるなくんば、豺狼の群と何ぞ異なる所あらんや、思ふに動物として彼等の下に居り、人間として彼等の外に立つは、蓋し特有なる精神即ち慈善心あるが故なり、然らば宜しく相互交親し個々相憐み、富者は其の快樂の幾分を割て之を貧人不幸者に與へざる可らず、是れ一方より觀れば富者の快樂を減じたるが如くなれども、人性の情誼より考へる時は富者は唯だ快樂其の者の性質を變更したるのみにして、富者に取りては快樂の一部を以て同種類なる貧民不幸者の貧困を購ひしものなれば、之に依て生ずる貧人不幸者の歡は同じく富者に取りては快樂たらざる可らざるなり、然りと雖も此憐愍の情、惻隱の心を以て必ず慈善事業の目的と爲す可らず、唯だ茲に云ふ所の者は富者が人類として慈善事業

をなすの至當なるを述るに過ず、

之に依て考ふるに慈善事業は國家上より見るも、人類の特質より推すも、爲さざる可からざるの一事なり、然れども若し其目的と方法の宜を得ざれば中世記に於けるが如く却て害毒を社會に流すに至らん故に其の目的を誤らざるよう進行するに非らざれば好果良効を印すべき慈善事業の痕跡をして憂ふべき歎ずべき記號と變ぜしむるに至る、吾人の注意すべきは實に此の一點也、世人往々慈善事業を以て宗教家のみなすべき事業の考思するものあれども、畢竟するに是れ慈善事業の性質を知らざるに困るものなり、慈善事業は既に述べたるが如く完美なる國家の造營と多數の福利安寧に關係を有するものなれば、政治家にもあれ、商業家にもあれ、宗教家にもあれ、苟も國民とし餘裕のあるあらば其の一部の財

産と一部の腦力を之に向て盡さざる可らざるものなり、然るに我國の如きは慈善事業は宗教家に非ざれば或る一部の者の爲すべき事業として他の國民は殆ど意に介せざるが如し、故に其の發達するや少なし、此の如にして能く歐米と同じく完美なる國家を造營するここを得べきが、是れ實に平日長足の進歩を以て自誇する我日本國民の爲めに惜む可き所なりとす

## 第十一章 「リカード」氏の賃銀及利潤論を評す

近來産業の發達の隆盛と共に資本と労働に關する説大に行はれんとす亦怪むに足らざるなり、而して其賃銀及利潤を論ずるに當て、其説く所「リカード」氏の説に近きものあり、之れ余が此處に同氏を論評し、一は以て氏の所説を明にし、一は以て氏と説を同ふする

人の注意を促がさんとするにあり

り氏は先づ生産の最大要素を分て二とせり、即ち資本と労働之なり、而して生産の結果として資本の得る所は利潤にして、勞力の得る所は賃銀なり、亦氏は利潤及賃銀は共に社會の情態殊に商業社會の情態如何に關係するところ甚だ多しとせり、氏は賃銀は他の物品と同じく經濟價格及市場の價格の原理、即ち需要及供給の法に依て支配さるゝものとせり。其言に曰く、勞力は他の物品と同じく買賣増減され、而して自然の價格及市場の價格を保つものなり」と、而して氏の説明する所に依れば、労働の自然の價とは、労働者が日々生活をなし、僅に子孫を養ふに足る可き價にして、市場の價とは、需要供給の原法に隨ひ實際市場に於て支拂はるゝ價なり、別言すれば市場の價格は市場に於ける需要多く供給少なき場合には

高貴なるべく、需要少しくして供給多ければ低廉なるべきなり、此く勞力の價に自然及市場の別あり、亦氏は自然の價を説明するに食物を以てせり、即ち食物は労働者に向て最も必要なものなるが故に之れが高低は直に勞力<sup>カ</sup>の價に影響すべく、勞力の自然の價は常に食物に比較して上下するものとせり、而して社會の進歩の結果は生産物の價を安直ならしむるが故に勞力の自然の價は隨て低下す、今氏の勞力の自然價格を考ふるに「アダム、スミス」氏の説に甚だ近きものなり、「スミス」氏云へることあり、賃銀は常に最低度に低下する傾あり、之れ勞力が相競争するの結果なるが故に自然の定限(Natural limit)とも云ふ可く、賃銀は決して此の最低度を超へて高く上ること無かる可し」と之れ「リ」氏の自然價格説と稍同じく、余の愚見を以てすれば、「リ」氏は單に「ス」氏の此の説を引延したるに

不過るなり

「リ」氏の勞力の市場價格の定義は眞に近しと云ふを得ず、何となれば氏は勞力が市場に於て他の物品と敢て異なる所なしと爲し、市場にある資本の高は即ち勞力の需要なりとの賃銀基本説を唱へ之を式とせば、貨幣の量 労働者の数 となるものこそせり、然れども勞力とは吾人の知るが如く特種のものにして他の商品と異り其の供給の如きは増減甚だ困難なるものなり、亦賃銀基本説の陳腐の誤説たるは亦説明を要せざるなり

氏の悲觀的觀察は終に氏をして云はしめて曰く、若し勞力の市價高貴なれば隨て人口は増殖すべく、人口増殖せば再び勞力の競争を來たし、前に高貴たりし價も舊の市價に下落すべし故に勞力の市價は常に最低たる自然の價に歸着す、此處に於ては獨逸の「フ

アーデインランド、ラカール「セラ」は之を評して賃銀の鐵則と云へり、即ち此の説を以て勞力者の隨ふ可き法とせば彼等勞働者は到底未來の進歩を望む事なく、遂に今日の悲境を以て満足するに至らんと云ふにあり

市場の價高貴なれば勞働者の數を増し、勞働者の數にして増加せば市場の價は下落すべし、故に市場の價は常に自然の價に歸依するものなり而して市場の價が自然の價より低落する時は、即ち之れ勞力者の最も困難なる時なりとの斷定は眞に近しと云ふ可らず、何となれば勞働者の最良の時は必ずしも人口僅少の時と云ふ不可、若し彼等の生活の度にして高からんか、彼等は益々節約努力し速に勞働者の苦境を脱して、資本家たらん事を望むが故に、妄に結婚し妄に幼兒を上るが如きことをなさざるべし、貧乏人の子澤

山は洋の東西を不問して相同く、労働者にして貧困ならんか彼れらは不注意となり、怠惰となり、自暴自棄となり、爲に家政治らず、徳義亂れ、反て幼兒の増殖を來たすものなり、愛蘭土に馬齡薯の飢饉のある毎に人口の大に増殖するは事實上の一例なり、故に氏が云ふ「人口の減少は賃銀の高貴を見る」と云ふは必しも然りと云ふべからざるなり、勞力の供給如何に僅少なるも需要にして多からざれば、賃銀の高貴は決して望む可らざるなり、假に一步を譲りて氏の云ふが如く、勞力の市場の價高貴なると共に人口(労働者の)増殖することなすも同時に勞力の需要にして多ければ、勞力の價は決して低落せざるなり

氏は云ふ資本の増加は其の増加の割合に賃銀を増すと又物品の價高ければ、勞力の自然の償高かる可しと、然りと雖る此の如き説

は余が已に云ひたるが如く所謂賃銀基本にして誤説と云はざる可らず、何んとなれば賃銀は單に過去に於て貯蓄せる資本のみに依て定めらるゝものにあらずして、未來に於ける生産を當にして仕拂はるゝ事もあるなり、氏の所謂勞力の自然の價は一定不變のものにあらずして社會の情態如何に依て變ずるものなり、即ち他の物價の高貴なるは之を高貴ならしめ低落なるは之を低落せしむるものなり、亦市場の價の高貴なるは必しも勞力者に益多しと云ふべからざるなり、何となれば若し食物等の價にして高貴あれば實際に於て益少きものあり、然れども若し他の物價にして不動なると同時に、資本増加せば労働者の境遇甚だ可なりとは氏の云ふ所なり、然れども資本の増加を以て直ちに賃銀の増加となすは、余が前に云ひたるが如く謬説なり、氏は新殖民地等に於て賃銀の

高貴なるは、資本の多くして勞力の供給少きが故となせるも、事實上より之れを論ぜば殖民新開地等に於て賃銀の高貴なるは、資本の増加と云ふによりて勞力の需要多くして、供給少く且つ生産の額多きが故と云ふ可きなり即ち殖民地等に於ける資本家は生産高きが故、又は未來に於ける生産高多しと信じて勞力の需要を促し、隨て賃銀をして高價ならしむるなり

「リ」氏も「スマ」派の學者なるが故に、貧民法 Poor Law を攻撃して大に自由策を設けり、曰く勞力は他の商品と同じく市場に於ける自由競争に依て其價を定めらる可く、決して法律制度を以て干涉す可からずと、雖然此の如きは「マンチエスター」派の迷夢にして吾人の採らざる所なり、自由競争の弊多き今日、殊に最も慎重なる干涉を要する今日、勞功の絶對的自由競争は我輩の首肯し不能るごころなり

氏の説に依れば賃銀に課する税は、賃銀を上げ隨て利害を僅少ならしめ、亦食物其他の日用品に課する税も日用品を高貴ならしめ、其割合に賃銀を上ぐるが故に、之れらは凡て資本家の利益を減少するものなりと、然れども之は正當の理論となすに足らざるなり賃銀に課する税、日要品に課する税、必しも其税の割合に賃銀を上げ利益を減額することあらざるなり、勞力に課する税は往々賃銀を上ぐることなく、反て勞力者の快樂の幾分を減じ生活の程度を低からしむることあり、日用品に課する税も結果に於て等しきものあり例へば勞働者の用ゆる米一石に付一圓の増税をなせば勞働者の賃銀は直に一圓だけ上ると云ふが如きは事實上決してあらざるごころなり

「氏曰く凡ての生産物は資本家(地主をも含む)及労働者の間に、利益及賃銀として配分さるゝものなるが故に、賃銀にしし高ければ利益は少なかるべきを云へり而して例を農に採て曰く、若し麥の代價にして高貴なれば賃銀は高貴なるべく、賃銀高ければ農夫の収益即ち利益は少かる可し、之を式に表はせば、

(譯文の註解) 賃銀 = 生産物 - (生産物 + 利益)

となるなり然れども利益が生産高を悉く取得するに云ふが如き事賃銀が之を悉く取收し去るに云ふが如き事は事實上あるべからざるこそなり

氏の言に曰く「普通物品の價高きは其物品を生産する爲めに費す勞力の價高きが故にあらずして、多くは勞力を費すが爲めなり」と即ち氏は「アダムスミス」氏と同じく勞力を以て價格を定むるもの

をなし、二日の勞力を要する物品は一日の勞力を要する物品の二倍の價を有すと信するものなり、然れども此の如きは其數誤謬にして此處に鮮明するを要せざるなり、

利潤に課税せば物品の代價は爲に騰貴し、結局消費者に依て拂はれざる可からずとは氏の説なり、而して食料品其他の日用品及び勞力に課する税は賃銀を高め、爲めに資本家の得可き利潤は減少するも、直接利潤に課する税は物價の騰貴となり消費者に依て拂はるゝが故に、資本家の利潤を減ずる事なしとは亦た氏の云ふ所なり、

然れども余輩の考を以てすれば、此の如きは眞理と云ふ可らざるなり、利潤に課する税の幾分は勿論税の移轉法に依り消費者に移轉され可きも、悉く之を移轉することは到底不能るなり、資本家は

利潤に課税されたる時に當り先づ之を消費者に移轉せん事を試む可きも、若し代價を高貴ならしむるが故に物品の需要を減ずるが如き場合には、敢て物品の代價を高むる(税の高だけ)事をなさず、自ら受く可き利潤の幾分を割て租税に充つ可きなり、故に「リ」氏の所謂勞力に課税するは税の割だけ貨銀を上げ、利潤に課する税は其割合に物價を高むるこの説は謬説と云はざるべからざるなり。「リ」氏の利潤及貨銀に關する税は略以上述ぶるが如し、其採るべき點なきにあらざるも、事實より之を云ふ時は一の謬説に不過るなり、

### 第十三章 婦女及幼年者の勞働

一利あれば一害の之に伴ふあるは自然の如くにして、若し一害あ

るを以て一利を斥んか、社會の發達を如何せん、一利あるを以て一害を放任せんか、經濟の紊亂を如何にせん、故に能ふ可くんば其の利益の進歩を務むるご同時に之に伴隨する弊害を刈除するの方  
法を講ぜざる可からず、然らざれば決して完全なる國家善美ある社會を建設する能ざるなり、今余の言んご欲する所の者は即ち一利一害の間に彷徨する婦人幼年者の勞働是れなり  
而して婦人及び幼年者の勞働は已に希臘埃及の怪神傳及び經典中にも屢々見る所にして、亦一家族悉く土窟に穴居せし時代に於ても夫は外に出て獵し、妻は内に在りて衣食を調理したるものなり、又移住時代に於ても父子夫妻悉く勞働したるは事實なり、之に依て見れば婦人幼年者の勞働は俄に今日に始りたるものに非ずして、遠く其の根源を歴史以前に發したるものにして、今日は唯だ



其の勞働の種類を變じ、其勞働の區域を擴めたるに過ぎざるなり。然りと雖も婦人幼年者の自由勞働は其の後私有財産の制度に會して消滅せり、即ち彼等を以て夫父の私有財産となしたるなり、故に妻子は夫父の意志に應じて左右せられ、父夫の權力ある抑壓の下に生活することとなれり、見よ、希臘雅典の憲法は明に婦人幼兒の權利なきを證せしに非ずや、羅馬に於ても同じく、夫父なるものは家長(Pater Familiae)として一種の特權を有し、妻子は彼等の奴隸たりしに非ずや、其他今日世界に雄飛する英佛に於ても亦た久しく婦人幼年者を財産(Chattel)として取扱ひたるなり、而して彼等婦人幼年者が再び自由に勞働し、經濟上法律上社會上に獨立の地位を占めたるは實に今を去る僅に百二三十年以前に過ぎざるなり、婦人幼年者は何が故に多年檢束し來りたる夫父の權力を脱して

獨立の地位に復するを得たるか、想ふに政治的、社會的、經濟的の三原素に基因せるならん、政治的進歩は自然の間に家長として嘗て認許せられたる夫父の權利を失はしめ、隨て一方には婦人幼年者の權利を振起するに至り、又社會的發達は慣習風俗及び道德に一變を來し、婦人幼年者に對し昔時の如く偏見をなすことなく、遂に其の地位を進むるに至れるなり、經濟的に於ても亦然り、商工業の發達は、此に諸器械の必要を生じ、諸器械の發明は婦女幼年者に多く職を與ふるものにして、彼等は其れ故に自働し自活して自立を完するに至りたるなり、以上三原素の益々進歩するに従ひ婦人幼年者の勞働も益々増加し、一千八百五十年米國に於て婦女勞働者の數は二十萬人餘なりしも、一千八百九十年には八千萬人餘になりたり、英國に於ても一千八百四十一年に製造業に従事する女工

は僅に四萬人餘なりしも一千八百九十一年には十四萬餘人に増加するに至れり、且つ今日發明の器械は健腕にして粗腦なる男子労働者を益するよりは寧ろ細心翼翼事に従ふ婦女幼年者を利すること多し、嘗て八十年前に増て五百人の最強なる男子労働者の爲したることも今日は一個の器械と孱弱なる數人の女工にて爲し能ふなり、故に彼等の需用を増加するに至るなり、其他彼等の賃銀は通常男子労働者の賃銀に比して低廉なるが故に隨て今日の増加を致せしなり、今や世界到る處婦人幼年者の労働を見ざる處なし、甚しきに至りては白耳義に於けるが如く婦人幼年者をして鑛山に労働せしむるに至れり、

彼等婦人幼年者が其労働の範圍を擴張する此の如く、彼等が労働の需用を増進する此の如く、彼等が其の數を増加する此の如し、是

等増進の結果として生出する經濟上の利害及び社會上の得失は如何、余は先づ其の利益の一斑に就て言はん、とす  
夫れ今日婦女幼年者が労働するは自然に彼等をして獨立の念慮を生ぜしむるに同時に彼等をして父夫兄弟に依頼するの卑劣心を破却せしめ是等の結果として彼等が労働したる賃銀を貯蓄するの必要を生じ、彼等をして節約の意を生ぜしむるものなり、獨逸の學者云へることあり、壓制とは被壓制者が壓制者に經濟的依頼をなすが故なり、と、眞に爾り、苟も壓制を厭ひ獨立を願はば經濟的依頼を斷たざる可からず、經濟的依頼をなさざらん、と欲せば勢ひ彼等は自働し自活し一身を自理せざる可からず、故に彼れらは労働賃銀の一部を貯蓄するの必要を生ずべし、又彼等の賃銀は低廉なるが故に其の労働して製造したる物品も亦安幼にて販賣するこ

を得べし、故に社會多數の貧人をして容易に購買するの便<sup>利</sup>を得せしむ、是れ彼等の労働が經濟上に及ぶ利益の點なり

又婦女幼年者の社會上經濟上必要の因子として認識せらるゝ以上は自然彼等自身に慎重を加へ又彼等自身に教育の必要を感じん、故に彼等が労働して得たる賃銀の一部を労働の餘暇は之を教育に費し其の思想を進むることを得んと欲するに至るべし、其他生活の程度の如きも其の賃銀の費消如何によりては漸々高尚ならしむることを得べし、米國労働委員長ライト氏曰く、婦女幼年者の増加は疑もなく彼等をして經濟上政治上獨立せしめ平等の位置を得さしむるに至るべし、蓋し婦女幼年者の労働は自立の精神を發揚し、隨て父夫の制裁を受くることなく、自身の意志と權利に依て自身を左右するが故に、嘗て社會に於て奴隸視せられたる

弊害を一掃するが謂ならん、是れ即ち彼等の労働に依て生ずる社會上の利害の點なり、

婦女幼年者の労働の結果は能く社會上經濟上の一部を利益するは吾人の喜ぶ所なり、雖然若し其の所謂利益なるもの、裏面を觀察せば如何なる結果が彼等の労働に依て生ぜしか、恐らくは彼等の労働が社會上經濟上に與ふる利益と同一の程度なる弊害を生ずるの感なき乎、否寧ろ彼等が造出する利益を以て彼等が造出する弊害を社會上經濟上より賠償することは難かるべし、見よ、彼等婦女幼年者の賃銀低廉なるは能く工業家をして安價に物品を製造せしめ、隨て商業家をして安價に賣買することを得せしめ、多數の貧人をして容易に購買するの利益を得せしむるも、雖も、彼等の賃銀の低廉なるは經濟上男子労働者の賃銀の低落を來

す一源因にして、婦人幼年者の労働が益々増加するは同時に一方には男子労働者の境界を益々縮小するものなり、好し假令縮小せざることも決して増張せしむることあきなり、増張することなければ男子労働者の賃銀を低落せしめざるも決して高價ならしむることなきなり、然れども婦人幼年者の労働は經濟上男子労働者の賃銀を今日に止めずして漸々低落せしむるを如何せん、男子労働者にして將來尙ほ貧困に赴んか、今日の狀態だも保持すること難らん、況んや將來其の地位を高め、其の品行を正し、其の價格を進むるが如きは得て望む可らざるなり、米國労働委員の報告を見るに、婦女幼年者及強壯の男子の共に労働する事業に於ては男子の賃銀は婦人幼年者の賃銀と殆ど同じく低廉なりと、以て婦人幼年者の労働が男子労働者の賃銀に向て不利益を來すことを見る

へし、又多數なる男子労働者にして一たび賃銀の低落に會し其身を今日より甚しき貧困の境遇に沈めんか、如何に安價なる女子幼年者の製造に成る品物ありとするも之を購買する力なきを如何せん、加ふるに男子労働者は社會の大多數なれば其の經濟上に及す弊害や少少にあらざるなり

又社會上より見るに彼等が自活自立の爲めに労働する結果は彼等の天真爛漫たる柔順の性質と身軀を變化して器械的動物となすに至れり、彼等は一の快樂なく終日器械と共に身軀を廻轉し、塵埃と等しく手足を舞蹈し、彼等が先に家に在りて母子相愛し、夫妻相ひ親みたる團欒の歡は今や變化して取締役の叱咤となり、呵責となり、不潔ある工場に漸く業を終へ、家に歸るも疲勞の身軀は彼等をして一家の整理と愛兒の教育を務むるを許さざる可し、故に

一家は亂れ、兒らは從て無智の徒となりのみ又、幼年の勞働者の如きも彼等が假令少しの賃銀を得ることするも其を以て教育を受くるが如きは彼等が勞働の結果として得る疲勞と時間の欠乏に依り到底不能るなり、故に幼年の勞働者は概して無學からざるを得ざるなり、

シカゴ大學のスマール氏云へり「婦女幼年者の勞働は社會の文明に<sup>害</sup>あり、如何となれば家制の整理を得んとするには婦妻をして常に内に在りて注意せしめざる可からず、又有用なる國民を作らんと欲せば幼年者をして家庭と學校とに於て充分なる教育を受けしめざる可らず、是等の事情は決して婦人幼年者をして出で、外に勞働するの時間を與へざるあり」と、爾り苟も善美なる未來の國民完全なる一家を保たんと欲せば婦人幼年者の勞働を或

る場合に於て止めざる可らざるなり、就中幼年者の勞働に至ては其の害甚しく、現に米國にエジヤン<sup>シ</sup>州の工場検査官の報知によれば、同洲の工場に勞働する幼年者三割以上は已れの勞働しつつある都市の名を知らず、六割以上は歐羅巴及亞米利加の名さへ聽きたることなく、其の他米國の名は聽きたるも自分の居住する土地の名は知らず云ふ者ありと此の如くにして幼年者の勞働は社會上弊害を生すべき者なりと云ふも不可なきなり  
尙ほ婦人幼年者の工場に於ける勞働に就て云はんには、婦女の勞働は彼等の健康を害すこと多く、又初年者の勞働は彼等の發達を妨害する大なり、殊に已婚の女子にして、懷妊せる者の勞働の如きは夥しく胎内の嬰子の健康を害し、能力を傷ふ事あり、蓋し婦女幼年者の工場に於ける勞働の身軀に害あるは左の理由に依る、

- (一)塵埃の空中に飛散する事
- (二)有害なる原料品を使用すること
- (三)有毒質の蒸氣室内に充滿すること
- (四)場内冷熱の變更及び其の高低の甚しきこと
- (五)工場内に於ける空氣の壓力の過度なること
- (六)人躰の或る一部分のみを使用すること
- (七)空氣流通の不完全なること

英國のドクトル、ア—リツヂ曰へり「婦女及び幼年者の勞働は健康を害すること多し、工場に於て永年勞働に健全を害ひたる婦女は到底將來健全なる妻となり強壯なる子供を産むこと能はず、又工場に苦役したる幼年者は天然的に成長する能はず、其の工場に於ける婦女幼年者の身躰に害あるや識るべきなり、且つ工場及商

店に於て多數勞働者の共に一室に勞役するは彼等の道德を害し、幼年者の如きをして知る可らざる惡事を多く學ばしむるに至るものなり、又婦女は常に他の破徳談を耳にするが故に貞節を破るに躊躇せざる弊を生ずるに至る、故に隨て善美なる一家、完全なる社會を造成すこ能はざる也、是に依て見るに婦女幼年者の勞働は一國一家一身の上に於て非常に利益あると同時に又一身一家一國に對して非常なる弊害を生ずるや昭々なり、然りと雖も非常なる弊害あるが故に一時に彼等の勞働を停止せんか、又其の弊害の經濟上社會上に及ぼすことは寧ろ彼等の勞働に依て生ずる弊害よりも多きを加ふるや明なり、且つ婦人幼年者の勞働は日一日に多きを加ふる今日の趨勢なれば、之を防遏する<sup>こと</sup>は至難中の至難なるが故に目下の急務とする所は唯だ彼等の勞働に依て生ず

る害部救済するにあるなり、其の悪弊を矯正するにあるなり、尙ほ將來を豫防せんとするに在り、細言すれば、労働の區域時間の長短、業務の炭質、工場の衛生、人員の配置等に注意を盡さざる可らざるなり。

注意一たび周到するに會せば、婦人幼年者の労働より生ずる弊害を漸々除去するを得るなり、故に今日一利一害の間に彷徨を望むと同時に伴隨する一害を漸々の間に注意と熱心の二事に依つて排除し一利をして益々大ならしめんことに務むべきなり、今や我國の如きも商業の發達に従ひ婦人幼年者の労働も亦増加したるが如し、曰くマツチ製造、曰く段通製造、曰く製糸、曰く焙茶、曰く錦筵製造、曰く織物、曰く紡績、曰く何と、彼等の労働は我國今日の進歩と共に増進せん、又彼等の労働は社會を益し、國家を理するならん、然

り、雖も其利益に伸隨する弊害の社會上經濟上を亂すも亦た多少にあらざるべし、經濟學者ホブソン氏云へり、今日社會の得る利益は家族の失ふ所なり、加ふるに我國の事物百般は歐米に及ばざるこそ遠きが故に、其婦女<sup>幼</sup>勞年者の労働に依て生ずる弊害も比較的多きを占むるならん、故に一方に於て婦人幼年者の労働の進歩を圖るに共に他方に於ては其弊害を漸次除去するの法を講ずべきなり。

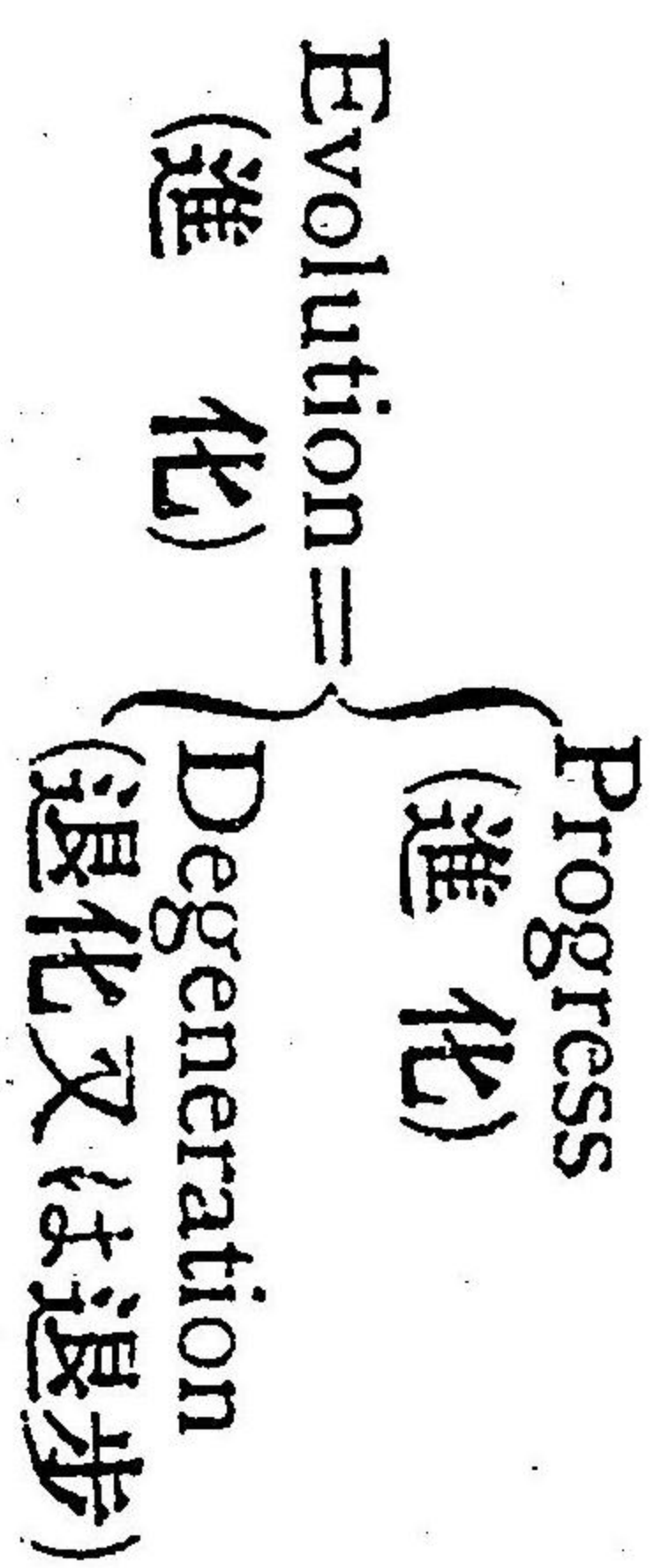
## 第十四章 退化論

眼を放つて宇宙間の森羅萬象を觀れば、或は現はれ或は滅し、或は來り或は去り、一として進化せざるものなし、天空に輝く星もなく、地中に潜む瓦石もなく、地の表面に生活する動植物もなく、人類の

組成せる法律制度となく日を重ね月を積むと共に變化し一分時たりと雖同形同式を保つこと不能るなり、即ち進化は自然の大法にいて之に依りて統治せられざる事物あることなし、

近來進化の文字學者の間に行はれ或は動物進化と云ひ或は社會進化と云ひ或は進化的制度と云ひ名詞に形容詞に動詞に新文字の使用せらるゝ事多し、然しながら之を用ゆる人之を讀む人共に往々其意義を異にし或は共に全く其意義を誤る者あり、故に余は先づ進化の意義に就て少しく云ふ所ある可し、英國の「ハツクスレ」氏曰く「進化とは事物をして現在の有様たらしめし過程 (Process) の記録即ち歴史を云ふ」と亦米國の「ジョーダン」博士曰く「生物の進化とは不變の法に依つて生物の變化するを云ふ」と即ち進化とは事物の變遷する過程にして世人が往々考ふるが如く進歩の義意

と同一にあらざるなり、進化と進歩は同意義の如く使用さるゝ事あるも之れ大なる誤にして「進」の一字が此の如き誤想を起さしむることなる可し今式を以て之れらの關係を現はせば



にして事物の進歩するも退化するも共に之れ進化の情態なり、余輩の考を以てすれば元來 Evolution 又は Entwicklung なる語を進化と譯せるは誤想を起さしむる基にして寧轉化と譯するの至當にして誤の少かりしなる可し、

然り而して歴史以後人類進化の方向は即ち如何、換言して云へば社會は普通世人の考ふるが如く進歩せるや將又ルーソー、カーベ



ンター一派の云ふが如く退化せるや、余輩は社會組織の或部分或は之を組成する個人の或點に於て退化せる所あるべきも今日の社會が昔日の社會に比し大體に於て大に進歩せり云ふに躊躇せざる可し、假令進歩の線は波形にして一直ならざりしにもせよ、進歩の線は常に退化の線に依つて伴はれたるにもせよ吾人々類の大に進歩せるは亦疑ふ可らざる事實なり、今日の人類及社會が昔日に比して退化せりとなすが如きは思ふに進歩の意義を解せざるに歸因するなる可し、

然らば進歩とは何ぞや、ギッディング氏曰く「客觀的に見れば進歩とは交通の増進、關連の陪増、物質的幸福の漸進、人口の増殖及理的行動の進化にして、主觀的に之を見れば同類意識の發達なり」氏は同情の發達及道理の進化は第二の現象にして同類意識發達の結果

となせり、亦「ガイヨ」氏の定義を見れば「主觀的に見れば進歩は道的及心的生活の發達にして、客觀的に之を見れば道理、同情及社會關聯の發達なり」と、

今兩者を比較すれば各長短を有し何れも完全なる進歩の定義云ふ可らざるあり、主觀的定義としては「ガイヨ」の方優り客觀的定義としては「ギッディング」の方優れるが如し稍完全なる進歩の定義は「ギ」ヨ」二氏の説を折衷して「主觀的に見れば進歩とは道的及心的生活の發達にして客觀的に之を見れば交通の増進、關聯の陪増、物質的幸福の漸進、人口の増殖、及理的行動の進化あり」となす可きなり、進歩は常に人類幸福の増進と一致せざる可らず、人類幸福に反する進歩ありせば之れ似而非の進歩にして眞の進歩にあらざるなり、人類の幸福は實に「マツケンシー」氏が曰へるが

如く (一)自然の征服 (二)社會機關の完全 (三)個人の發達なる三の元基に依つて成立す、換言すれば (一)經濟的富饒 (二)社會構造及効用の漸進 (三)人類個人性の發達は進歩の缺く可らざる條件なり、然り社會は進歩せり吾人々類の幸福は増進せり、然しながら進歩は常に退化に依つて伴はれ退化の勢は時に或は猛烈にして全く進歩を掩殺するの傾向あるも亦事實にして吾人の留心注意す可き事あり、此處に於てか吾人は人類の幸福及社會進歩に向て務むるに共に亦退化の事實を認め之を防遏するの方策を講ぜざる可らず、ギッディング氏曰く「進歩の價は過度の活動及慾望の激勵より來る道的及生理的退化に依つて拂はる、進歩の速力愈大なれば此の價は益高く進歩にして愈早ければ路傍に仆る、疲勞者の數愈大なる可し、進歩は宇宙に於ける他の動力と同じく自身に

向つて反動す」即ち社會愈複雑となり諸種の關係益増殖するに共に個人の活動度を過すものあり、自由平等の聲愈高まるに共に野心の分を過すものあり、故に或は道德的に或は生理的に退化する者の數愈増加するは事實にして眞に嘆ず可きの至なり、余は今退化の實例を擧げて其事實なるを證する所ある可し、生物界に於ける退化の實例は寄生木、蛇、鯨、被包虫、寄生虫等の如し、寄生木の如きは自活の力なく常に他の樹木に依つて生活し僅に親木の滋養分を吸取て其生を保つものなり、蛇の如きは始め四足を有し其運動に依つて歩行せるも退化の結果四足を失ひ後には腹内筋骨及鱗の動作に依つて動くこととなり、鯨の如きも進化學者の云ふ所に依れば元陸住動物なりしも海中に移棲して以來退化し魚の如く變化せるものなりと云ふ、北米合衆國「テンネッシ

「州の洞水中に生住する一種の魚あり名けて盲目魚と云ふ此の魚は始目を有したるも暗黒洞中に生住することとなりしより」必要は機能の退化を來たす「てふ生物進化の原法に依り遂に盲目となりたるものなり動植物界に於ける退化の實例は甚だ多く枚舉し不能る程なるが人類界に於ても其數少からざるなり自殺、發狂、犯罪、ポーペリズム(怠惰病)、貧病依、孤兒鰥寡、暴舉等は皆人類退化の實例なり

文明の餘弊として自殺者の増加するは「メーヨ」「スミス」「モーセリ」氏其他の書に著るも明瞭にして疑ふ可らざるなり、歐洲大陸にて自殺の中心は文明の中心たる巴里及「サクソニー」にして其統計を見れば歐洲に於ては那威一國を除き凡て他の國に於ては増加せり即ち佛國にては千八百二十七年又千八百七十五年の間に三倍

しプロシヤ王國にては二倍せり英國にても千八百三十二年には人口百萬に付き自殺者六十二人の割合なりしも千八百九十一年には八十五人の割合となれり、米國に於ても自殺者の數年々増加し其割合の最も多きは米國文明の中心とも稱せられたる「マサチユセツツ」州なり我國に於ても自殺者の數は明治二十四年に七千四百九十九人明治二十五年に七千二百四十人明治二十六年に七千三百八十九人明治二十七年に七千五百四十五人明治二十八年に七千二百六十二人明治二十九年に七千四百五十九人の割合にして決して少々にあらざるなり、發狂者の統計は人口統計中至難の統計にして詳細を得る事不能るも文明の漸進と共に増加するは事實なり合衆國に於ける一例を舉ぐれば千八百八十一年に同國の公私癲狂院患者の總數は四萬一千三百三十人なりしも千八

百八十九年には九萬七千五百三十五人となり其増加の割合は實に七割三分餘なり亦紐育州に於ては千八百八十年より千八百九十二年の十二年間に年々平均六百六十人宛の増加ありたり犯罪も人智發達、經濟情態の變遷、人口稠密等の結果として増加するが如し(假令犯罪の種類は變化す可きも)米國に於ては千八百五十年には人口百萬に付き罪人の數二百九十人の割合なりしも年々増加し千八百九十年には千三百十五人の割合となれり、離婚の如きも一家組成の法益困難となり自由意志の愈發達するに共に増加するの傾あり、經濟情態の變遷は貧富の懸隔を甚だしくし一方には自活自養し不能る貧困者を生じ他方には無爲無能徒に父祖の遺産に依つて生活し所謂無勞の快樂を貧る者を出すは現今進歩の餘弊にして社會退化の一大現象なり余は歐米各國に於て貧富

懸隔の結果として慈善を受く可き者が年々増加する統計を有すれども讀<sup>め</sup>の倦怠を恐れ此處に之を掲げざる可し、以上の實例に<sup>え</sup>選り生物界にも人類界にも退化の事實あるは疑ふ可らざるなり余已に進歩を説く亦退化を説明せざる可らず、退化とは事物の衰廢する過程を云ふ即ち能力及智識範圍の縮少を意味す而して退化の法は進歩の法と同じく萬物を通じて均しく生物退化の法は亦能く人類及社會退化を統治するものなり、雖然此處に吾人の注意を要す可きは個人の退化と社會の退化とは必ずしも相同じからざるの一事なり、即ち單に數十又は數百の退化的個人あるが故に社會は退化せりと云ふ可らざるなり、社會の退化は之を組成するに基礎となる(可)個人又は家族の多數が退化せる場合を云ふなり、ギッディング氏の曰く「人口に於ける多數人の意退化は必ず

社會の組織及性質の退化に依りて伴はるる詳言すれば、進歩を危くするに足る個人又は家族の退化は即ち社會の退化なり、余は以上進歩と退化の關係、退化の實例等を概論したれば之より退化の原因に就て少しく述べる所あるべし

個人は老朽するに共に退化すれども之れ自然的退化にして吾人の如何とも爲し能わざる所なり、雖然其老朽するにあらずして退化するものは之れ不自然的退化にして吾人が精意研究し且つ之れが妨遏の法策を考究す可き所なり、不自然的退化を妨遏せんと欲せば先づ順序として其原因を知らざる可らず、然り而して個人退化の原因に二種あり、他動的原因、自動的原因、即ち之れなり、今他動的原因を列記説明すれば左の如し、

#### 他動的原因

一 活動範圍の縮少、活動範圍の縮少は必ず活動を減じ退化を來たす可し、大陸植物が小島嶼に移され陸生植物が海中に移住する時は退化するが如き、皆此の理に基くものなり、亦人類界に於ても奴隸制度、貧困、孤獨生活の如きは比しく縮<sup>せ</sup>活動範圍を縮少し、人類の退化を來たすものなり、殊に孤獨生活(即ち廣き社會に隔離して生活すること)が個人退化を生むの例は彼の北米合衆國北キヤロライナ州の山中に住する退化的白人(The degenerate White of the White Mountain) 及紐育のシユーク<sup>族</sup>を見ても明白ならん

二 衣食住の自由、競争は活動と奮發を生じ、活動と奮發は人類をして進歩せしむ、此の理と此の事實は決して疑ふ可らざるものなり、嘗て「ダーウ井ン」の唱へたる自然淘汰は已に生物學上の定説にして「ワイズマン」其他の學者が事實として立證せる所なり、即ち自

然は生物をして競争せしめ其環象に適するに生存發達を許し不適者を滅殺す、競争には政治的競争、産業的競争、宗教的競争、社會的競争、動物的競争の別あつて或る種の競争が或る場合に於て有害無益なるは勿論なれども大體に於て競争は進歩の第一階梯なり、衣食住にして自由に供給され不勞して取得せられんか衣食住に對する競争は絶無となり隨て人類をして怠惰ならしめ退化せしむ可し、英國の「キッド」氏曰く「生の法は始より一定不變なり即ち間斷なき且つ免る可らざる苦難と競争は間斷なき且つ免る可らざる撰擇と拒棄を生じ遂に間斷なき且つ免る可らざる進歩を來たす」と眞理と云ふ可きなり

三、産業情態の變遷 産業情態の變遷は人類機能の退化を來たすものなり機械の使用は往々にして筋肉をして不用たらしめ發明

的精神を痿殺することあるが如き之れなり亦急激なる變遷は多數の退化者を生ず例へば英國産業革命の結果として多くの貧者病者浮浪者を出したるが如き之れなり

四、工場等に於ける不意の災艱 工場に於ける災艱は所謂職業上の災艱にして多くの場合に於て職工自身の注意のみにて之を避くること不能るなり、工場主の不注意、工場建築の不備、危険なる機械は往々職工をして不具者疾患者たらしむ亦鐵道の如きも多く災艱を生ずるものなり例へば合衆國の鐵道に於て云へば平均各百人の機關士に付き一人の死者、平均十人に付き一人の負傷者あり

五、就業の病氣を醸すもの 職業の病氣を醸す者あるは「アーリツ」氏の「職業上の病氣」其他の書物又は實地に徴して見るも明白な

り紡績工が空中に飛散する綿片を呼吸し焼物工が常に過度の熱に近づき、帽子工が間斷なく寒室及温室に出入し硝子工が火邊にて硝子管を吹く等に依り或は肺病を生じ或は癩麻質斯を生ずるが如きは其例なり

六、婦女及幼年者の過度及不適當勞働 婦女及幼年者をして過度及不適當に勞働せしむるや必ず彼れらの身體、健康、及精神を炭する亦論なきなり終日石炭籠を肩にする婦女に健全なる母體を求るも得可らざるなり終夜紡績場に勞働する幼年に學識を求むるも得可らざるなり然り而して此處に吾人が最も注意す可きは婦女及幼年者の退化は單に現代のみの退化にあらずして來る可き時代の退化なること之なり

七、時候に依つて職業なきこと 職業の時候に依て異り又は絶無

さなるは退化の一原因なり降雨の時節には屋根工露店の商人等が一時職を失ひたる爲め或は無職業者となり或は犯罪者或は貧病者さなるが如き其例なり即ち職業なき爲めに不良の性質を有するものは犯罪者不道德者となり其善良の性質を有する者も雖往々病者貧者さなるは事實なり

八、不適の住地 不適の住地は個人及人種の退化を來たすものなり先づ個人に就ての例を云へば不健康の生住地貧屈の如き之れなり即ち濕氣多き池邊河畔に住む者の癩麻質斯患者となり熱病者となり貧屈に任む者の盜賊、怠惰者、賣淫婦、乞食となるが如し亦人種に就て云へば彼のアラスカに住するエスキモー人種が其氣候嚴寒衣食不足の爲め發達せざるが如き昔日歐洲を震動せるアラビヤ人及ムーア人が熱帶地に生住せる爲め遂に退化滅亡せる

が如き皆其の例なり印度に移住する英國人は必ず三代にして退化すこ聞く炎熱の然らしむる所なるべし

九法律及制度、法律及制度は必ずしも退化の原因にあらず普通の場合には却て進歩を増し退化を妨ぐものなり雖然或る種の法律及制度が或る場合に於て個人行爲の自由を禁じ奮發心を殺ぐことあり絶体的箱詰主義は人心の興奮を禁遏し個人の退化を來たすものなり米國の文學者「ソーロー」嘗て歌て曰く「風罷みて雪丘起るが如く眞理靜止して制度現わる暫にして眞理は制度を吹掃し去らん」と

#### 自動的原因

一寄生の習慣、凡て依頼は機能及智識の退化を來たすものなり生の法は道德を知らず故に自動自活するものを發達せしめ他に

依頼する者を退化せしむ、彼の寄生植物、被包動物及小囊動物の如きは常に他に依頼して生活するが故に退化的動植物なり亦人類界の寄生者も皆神經機能身軀の健全ならざる退化者なり、之に就て吾人の常に留心注意す可きは不科學的の慈善が徒に慈善の目的を達すること不能して多くの寄生者を生ずること之れなり伊太利アオスタの愚病者、米國イリノイ州のイシモール家族の如きは適切の例なり、無智の慈善は社會不幸の半を生ずるとは實に名言なり眞の慈善は困苦と不幸の根本を碎破せざる可らず、力は力を生み智は智に導くことは生物學上の定説なれば慈善も亦此の定説に隨ひ怠惰者をして怠惰の習慣を遣し病者をして病氣を傳へざらしめざる様努めざる可らず

二奢侈、過度の奢侈が身的及智的退化を來たすは事實上明白に



して敢て説明する必要なからん

**三 飲酒**、飲酒は病氣、放蕩、發狂、犯罪等の原因にして退化の間接原因なり、飲酒は退化の原因にして亦結果候にして根源なり即ち飲酒は之れが病氣、犯罪等の原因たる場合に於て退化の原因となり亦個人が退化の結果飲酒にのみ耽り怠惰となる場合に於て結果となるものなり、飲酒が貧困を生むは英國「ブリス」氏の調に依り其犯罪を造るは「ビーバン、ルイス」氏の調に依り、其發狂の増すは千八百二十五年那威に於て酒稅廢せられ自由飲酒行はるゝと共に直に發狂者の數五割以上増加せる實例に依り明瞭なり、亦飲酒の惡習は往々子孫に依て摸倣さるゝものなり

**四 不道德の行爲**、詐欺、偽罔等は正當なる精神の活動を殺ぎ過度の生殖的行爲は身躰及神經機能の疲弱を來たし共に退化の原因たり殊に過度の生殖的行爲は往々花柳病の如きを生じ獨り個人を害するのみならず亦一般社會に毒を流すこと大なり

**五 疲勞**、適宜の運動は精神と身躰を完全たらしむるに必要なもの過度の運動は却て心身の疲勞となり舊躰に復することを妨げ全く退化せしむることあり

**六 病氣**、病氣は元來退化の他動的原因なれども八個の素行を亂せるがため發せるものは之れ個人が求めて之を得たるものにして自動的なり放蕩の結果之を發し個人の退化となる場合に於て病氣は明に自動的原因なり

**七 阿片、喫烟、モルヒネ服用等の習慣**、本邦にては阿片を喫烟し又は他の劇薬を服して一時の愉快を貪るの習慣なしと雖他の東洋諸國及歐米に於ては往々行はれ之れが爲め個人の退化するもの

多し阿片、モルヒネ、コカイン等を使用するは一時興奮又は睡眠を  
 與ゆるが故に醫術上必要なるも習慣として日々之をなす時は或  
 は心身の衰疲を來たし或は神経を激動せしめ其個人を害する實  
 に恐る可きなり

八不勞の快樂、不勞の快樂は人をして怠惰ならしめ義務の感念、  
 決行の精神等を消却するものなり

以上列記説明せる所は個人退化の原因にして事實上の議論なり  
 個人は以上の原因に依つて退化す然らば社會は如何にして退化  
 するや、畧言して云へば社會は (一)退化せる個人が自由に配偶さ  
 れ退化の種子を遺傳するとき (二)個人の活動を勧誘することの  
 減殺され隨て退化者を生出するとき (三)退化者を自由に保護扶  
 養し退化者の減滅を妨げ之を増殖するとき に必ず退化するもの

なり故に社會の退化を防ぎ進歩を計らんと欲せば先づ退化せる  
 個人の改善を計り之れらの者をして退化的子孫を造らしめざる  
 様に爲さざる可らず社會進歩は畢竟社會共力及不適者の撲滅に  
 歸因するものなれば社會制度も法令も政治も慈善も必ずや此の  
 二者の社進を計らざる可らざるなり

## 第十五章 トラストの時代

過去の世界歴史を回顧すれば社會は時代時代に隨て或る特種の  
 問題を解釋することに努め居たるもの、如く思はる例へば往昔  
 未開の時代に於ける人民は單純なる衣食住を得るの外は凡ての  
 能力と時間を戦争に向て費し居りたる故國家の如きも單に戰事  
 即ち如何にして國民を保守せん如何にして外敵を攻撃せん云

ふが如きことにのみ苦心せり、此の事代が所謂戦争時代なり、次は宗教時代にして即ち人民の智識道徳が稍發達して彼れ等が宗教の自由を得んが爲めに争亂したる時代なり、世界各國の歴史を見るに一として宗教的争亂の記事あらざるものなし、舊來の專制的軍事政府は抑壓の法を採り開發せる人民は精神の自由を要求するが故に到底衝突を免る可らざりしなり、而して宗教的革命が幾千萬の人命を捨て或は幾百萬の家を焼き屍の山を築き血の雨を降して漸く宗教の自由を得たる後に來りたるは之れ政治的争亂時代なり、即ち人民の智識意志が開發され國家が愈強大となり政府の爲す可き用務が増加せると共に人民が一般に政治に就て留心するに至れり、人民が權利の伸張を絶叫し自由平等を要求せる結果として遂に佛國革命英國革命米國革命の如きもの現出せる

百八十四

なり然れども戦争時代の刀槍廢され宗教時代の争亂罷み政治時代の狂瀾の治るに共に茲に新時代は到來せり、是れ即ち今日吾人の生活する經濟時代、即ち産業的競争時代なり、アダム、スミス、リカード、ミルケスネー等の經濟説と産業革命以後の經濟事態は一般人民をして此經濟時代の到りたる事を知覺せしめたり、十九世紀の上半期に於て凡ての經濟的法則は一變されたり、即ち工場生産法は發達し市ては擴張せり之れと共に富は結集し資本と勞働の間は隨て遠かれり、此の變化の結果として如何にして資本を結合せんか、如何なる勞働組合を織組せんか等の問題は續々現出するに至れり、然り吾人の時代は經濟時代なり、吾人の社會は産業的社會なり、而して今後如何に永久に此の經濟時代と産業社會は持續され可きかは勿論吾人の斷定し不能る所なれども先づ數年又

は數千年にして終る可きものに非るが如し、或る經濟學者は斷言して曰く經濟時代は人類の最終時代なり經濟時代の極は人ご自然の力をして最高點に發達せしめ所謂經濟的自由を完全ならしむと斯の言或は眞ごして採るに足る可きものなるべし

今日の時代に於て吾人の最も注意研究す可きは所謂産業結合の問題なり、同盟罷工、無職業、工場法等問題は社會改良家の注意を曳き撰擧權、地方自治國際法等の問題の政治家政治學等の研究する所なり然れども産業的勢力が無聲の間に少數者の手中に聚合されづゝあるは事實なるに拘らず未だ多く我國人の注意を引かざるが如し、されど産業的智識の發達及科學的發明は此の資本結合をして容易ならしめ事實ごして現出せしめつゝあるなり英國のトインビー嘗て曰く「結合は未來の標號なり」と果せるかな此の標

號は已に今日の實際ごなれり、勞働の方面に於ては勞働組合共利組合等組織され資本の方面に於ては會社及トラストの組織現出するに至れり

資本結合に關し吾人の最も注意す可きはトラストの組織なりとす、人々が資本を結合して經濟的勢力を得ることを知覺してより一方に於てはコーナリング及プールの如きものを組織し他方に於ては商業組合、合名、合資、株式及會社トラストの如きものを組織するに至れり此くして資本は産業界に於て方陣的步調を以て進行することゝなりぬ而して其最も強大にして且速力を有するもの所謂トラストなり、千八百八十二年米國に於てスタンダード石油トラストが組織され其成效が世間に發表せられてより之を摸倣するもの續出するに至れり「フオンバレ」氏曰く「學者は可否を